

クニャー・ダヤク族による焼畑システムの変容

井 上 真*

Changes in the Swidden System of the Kenyah Dayak Tribe

Makoto INOUE*

Since the 1950s, the Kenyah Dayak people have been moving out of their isolated home. The further they migrate downstream, the more the monetary economy infiltrates into the village. At the same time, social and economic structures such as work organization, the mutual aid system, and the traditional land tenure system change.

As the result of such changes, the originally sustainable swidden system has changed to a less sustainable one.

To examine the dynamics of the swidden system practiced by the Kenyah people, the infiltration of monetary economy and the effect of the system on the environment are adopted as parameters.

はじめに

焼畑は、太古の昔から現在まで営々と繰り返されてきた。その多くは熱帯の生態的秩序を乱すことなく、自然と人間の共存を可能ならしめる健全な土地利用システムであった [Spencer 1966; Grandstaff 1980]。焼畑が熱帯林減少の原因として、一国のあるいは熱帯地域全体にわたる社会的問題となったのは、つい最近のことである。FAO [1982] によると、近年の熱帯林減少の45%が焼畑の結果であると言う。ここでいう、森林の「減少 (deforestation)」とは、樹木による被覆が地表の10%に満たない土地利用形態への転換のことであり、森林の生産能力の長期的低下を表す「劣化 (degradation)」とは区別されるものである。よく議論的となる木材の商業的伐採（主に

抜き伐り）は、森林劣化をもたらすものである。森林減少の直接的原因ではないのである。であるにもかかわらず、商業的伐採と森林減少との相関関係は高い [井上 1988]。これは、商業伐採用の林道によって、焼畑農民が既伐採林（商業伐採跡地の森林）へ侵入しやすくなったためだ。そして、焼畑の繰返しによって、まずは伐採道路沿いの森林から減少してゆくのである。したがって商業伐採は森林減少の直接的原因ではないにしても、誘因としてとうてい見逃すことは出来ないのである。森林減少と諸要因間の重相関係数でも [永田 1990]、商業伐採は、焼畑耕作や燃料採取と共に森林減少への関与はきわめて大きい。

では、森林減少の45%の直接的原因であるとされている焼畑とはいかなるものか。一口に焼畑と言うと誤解を生じかねない。実に様々なタイプの焼畑が存在し、森林減少への寄与度合も異なるからである。筆者はかつて焼畑を大きく3つに分類して森林減少に関して

* 農林水産省森林総合研究所 ; Forest Management Division, Forestry and Forest Products Research Institute, 1 Matsunosato, Kukizakimachi, Inashiki-gun, Ibaraki 305, Japan

議論した〔井上 1988〕。比較的長い休閑期を持ち森林生態系と調和した「伝統的焼畑」、地力収奪的な「非伝統的焼畑」、そして両者の中間的な性格を持つ「準伝統的焼畑」の3つである。このうち、「伝統的焼畑」は奥地に住む種族によって営まれるもので、森林減少とは無縁の存在である。森林減少と直結するのは、まず第一に「非伝統的焼畑」、そして「準伝統的焼畑」である。「非伝統的焼畑」のかなりの部分は、農村部から押し出された土地無し農民によって行われている。この土地無し農民の析出構造については、農業経済学及び開発経済学等の研究成果からうかがい知ることが出来る〔渡辺 1986〕。したがって、この種の「非伝統的焼畑」による森林減少をくい止めるためには、農村で土地無し農民が析出されないようにすると同時に、森林地帯に侵入した農民達がこれ以上森林を破壊しないで生活できるような方策をたてる必要があることは、森林・林業関係者の間でも既に常識となっている。現在、熱帯林減少問題の解決策として注目を浴びている社会林業 (Social Forestry)¹⁾ やアグロフォレストリー²⁾ のプロジェクトは、ほとんどがこの「非伝統的焼畑」農民を対象としている。

これに対して、第2の要因である「準伝統的焼畑」については、あまり議論がなされていない。「準伝統的焼畑」とは、「伝統的焼畑」

が何らかの条件及び影響のもとで次第に変容し、ついには「非伝統的焼畑」へと移行する途中の過程をさす。さきの「非伝統的焼畑」の一部も、元々伝統的焼畑民であった人々によって行われているのである。したがって、熱帯林減少とのかかわりで焼畑を捉える場合には、農村から押し出された土地無し農民による「非伝統的焼畑」だけでなく、元来伝統的焼畑民であった人々による「準伝統的焼畑」及び「非伝統的焼畑」についても論じなければ、正しく問題を把握することは出来ないであろうし、実効ある対策をたてることも出来ないであろう。この問題に関して、中心となる学問的課題は、「伝統的焼畑」の変容構造の解明であり、これがわかってからでないと森林保全策は議論できないはずである。

森林生態系と調和する形で続いてきた熱帯の焼畑システムが、自然のキャパシティを超え、森林に対する不可逆的な破壊をもたらすに至った背景には、技術的システムのうちに大きな変容があったのはもちろんのこと、経済・社会構造にも以前と異なる何らかの変化があったと想像できる。このような焼畑システムの動態を、技術的、経済・社会的側面の総体として捉えるのが本稿の課題である。

I 方 法

1. 調査方法

実際に集落レベルでは次の点を把握することに努めた。土地保有制度、焼畑用地の循環方法、焼畑技術、労働組織、投下労働量、労働及び土地生産性、家計、相互扶助制度、外部との経済的紐帯等である。以上の点を明らかにするため、注意深く聞き取り調査を行なった。集落の長老達（首長も含める）から概要を聴いた後、各世帯主に対して調査票をもとに、半日から1日かけて聞き取り調査を実施した。限られた時間の中で投下労働量に関

1) 社会林業 (Social Forestry): 地元住民を追い出して行う商業的な用材生産林業に対して使われ始めた用語。住民のためになる森林を、住民の参加によって造成し、最終的には住民の福祉の向上を図ろうとする林業活動。

2) アグロフォレストリー (Agroforestry): 農作物あるいは家畜を、いろいろな空間的あるいは時間的配置のもとで育成する土地において、永年木本植物を意識的に育てる土地利用システムの総称である。社会林業を実施するための具体的な技術（土地利用方法）としてアグロフォレストリーが適用される場合もある。

する正確な調査は困難なので、大まかに1人が朝から昼まで働いた場合、あるいは昼から夕方まで働いた場合を0.5人・日、朝から夕方まで働いた場合を1人・日とした。また焼畑面積に関しては、聞き取り調査だけでは甚だ心許ないので、コンパスと巻尺を使って実際に面積を測定した。さらに、彼らは焼畑跡地の植生をその遷移の段階に応じて命名・区分しているの、彼らの基準を明らかにするための簡単な植生調査も実施した。

2. 対象集落選定における本研究の特徴

東カリマンタンにおける伝統的焼畑の変化については、1979-1981年に実施されたMABプロジェクト（米国森林局及び国際開発庁の資金的援助のもとで実施された Man and Biospher Program）の一連の成果等 [Vayda, Colfer, and Brotokusumo 1980; Colfer 1983; Kartawinata *et al.* 1984; Kartawinata Vayda 1984; Hadi, Hadi, and Hidayat 1985] から読み取ることが出来る。これらは、筆者の言葉を使うならば、奥地に住む部族による「伝統的焼畑」、奥地からマハカム河等の中下流域に移住した集落での「準伝統的焼畑」、他の島からの移住者による都市近郊での「非伝統的焼畑」という3つのタイプの比較研究であった。実は筆者自身も、研究開始時には同様なフレームワークを設定していた。しかし集落調査を始めて比較的早い時期に、予想を上回る速度で東カリマンタンの焼畑システムが変容しているのに驚いた。ドラスチックな焼畑システムの変容という現実の前では、異なる種族を含む3類型間の単なる比較研究の意義も薄らいでしまいかねない。筆者自身は、その時点で調査のフレームワークを変更せざるを得なくなったのである。すなわちボルネオ島の典型的な焼畑民族（自給用陸稲を主要生産物とする焼畑を営む種族）であるクニャー族³⁾に対象を絞り、彼

らが奥地から下流域に移住するにつれて、焼畑システムが如何に変容するかを追跡することにしたのである。同一種族であるからこそ、各集落での焼畑システム及び社会・経済構造の相違を、そのまま移住による貨幣経済の浸透を起点とする変容と見なすことが出来るのである。

3. 焼畑システムの動態を表現するための基準

東カリマンタンの焼畑に関する上述の諸研究は、佐々木 [1970] の言葉で言う、各類型に当てはまる集落を1～2選択し民族誌的調査を実施した後、いわば地理学的に比較したものであった。しかしながら比較の基準が明確でなく、各集落のモノグラフィーの単純比較にとどまっている。本研究では Turner and Brush [1987] 等のアプローチと同様に、各集落の焼畑を無理やり類型化することはせず、一連の変化として位置づける。その場合の基準は分かりやすく、しかもある程度数量化できることが望ましい。また焼畑システムの変容を通して、人（経済状況）と環境（森林）との係わりの変化を現象的にとらえ易い基準であることが望ましい。

通常、経済は大きく2つに分類される。人々が生活必需品を自分達自身で獲得する自給経済と、商品の交換を通して獲得する商品経済である。後者の商品経済は、さらに物々交換経済と、現金を利用して商品交換を行う貨幣経済とに分けられる。現在、東カリマンタンにおいて、完全な自給自足経済の中で生活

3) クニャー・ダヤク族：日本語のカタカナ表記だと実際の発音とかなりのずれがある。Kenyah の場合、内堀 [1987] の表記にしたがったが、「クニャー」よりも「ケニャ」あるいは「クニャ」の方が実際の発音に近い。Dayak の場合も、日本語で表記すると「ダイヤッ」、「ダヤッ」、「ディヤッ」、「ダヤック」などいろいろ可能である。

している人は存在しないであろう。全ての人は程度の差こそあれ、商品経済に組み込まれているのである。一つの社会の中で、商品経済と自給自足経済の比率、あるいは物々交換経済と貨幣経済の比率を求めるのは不可能に近い。人々が利用するあらゆる物を把握しなければならないからである。そこで、外部の人間が把握することができる経済状況を示す基準としては、当該集落における商品経済の絶対量が考えられる。しかし、商品経済の全体を捉えるということは、人々が交換によって得た商品全てを把握することであり、これまた至難の技である。少なくとも、商品経済の中でも、現金を使用して購入した商品の量、あるいはそのために使用した貨幣量に限った方が把握しやすいのは確かである。このような理由から、「貨幣経済の浸透」を焼畑集落における経済状況を示す基準の1つとする。具体的に、貨幣経済の浸透をはかる方法としては、集落の中で流通している貨幣量が考えられる。さらに、この流通貨幣量を示し、しかも調査から知ることのできる指標として「一戸当たり平均年間現金支出」を適用する。

人々をとりまく経済条件の変化は、焼畑システム及びそれを合理的に行うための社会構造の変容をもたらすであろう。人間と環境とをつなぐ接点にあるのが焼畑耕作であるから、人間の環境に対する影響は、すなわち焼畑耕作の環境に対する影響のことである。これは、厳密には自然科学的調査を必要とする。しかし、生態系と調和する伝統的な焼畑用地の循環方法と森林を次第に劣化させてゆく収奪的な循環方式とを比較すると、休閑期における植生の回復度合が環境への影響を示す1つの指標として利用できることがわかる。これなら、植生調査によって容易に把握しうる。したがって、具体的には「休閑期における植生回復度」を第2の指標として、「環境への影響」を示すことにする。

つまり、焼畑の動態を示す基準として「貨幣経済の浸透」と「環境への影響」を設定するが、具体的には「一戸当たり平均年間現金支出」と「休閑期における植生回復度」という指標を利用するのである。

フィールドワークを通して得た印象から結論的に言えば、クニャー族が下流へ移住すればするほど貨幣経済の浸透は高まり、労働組織、相互扶助制度、慣習的土地保有制度、土地保有構造などの社会構造も変貌する。同時に焼畑システムは次第に不安定（環境を破壊する方向）なものへと変質してゆく、とみることができる。

II 調査地域の概要

1. 奥地からの人口流出

ボルネオ島に住むプロトマレー系諸民族を総称してダヤク族と言う。ダヤク諸族の分類については定説がないが、言語的には大きく5つに分けられる。南ボルネオ群（ガジュ族、オットダヌム族、マニャン族他）、カヤン・クニャー群、イバン諸族群、クレマンタン群、北ボルネオ群（ムルット族、クラビット族、カダザン族他）がそれである。

クニャー族は文化的にカヤン(Kayan)族と近い関係にあるといわれ、上記のようにカヤン・クニャー群とまとめられることもある。しかしカヤン族の言語が単質的なものに対してクニャー族は多くの言語群に分かれている点、またカヤン族の場合長大家屋自体が1つの集落であるのに対して、クニャー族は複数の長大家屋で1つの集落を形成する点などの違いがあり、自らはお互いにはっきりと区別している〔内堀 1987〕。クニャー族の人口は約4万人(1975年)と推定されレボ・タウ、レボ・ジャラン、レボ・バコンなど40以上の下位集団に分かれている。

クニャー族の古老の話によると、クニャー

表1 カヤン・ウルー郡の人口推移

1966年	1975年	1981年	1988年
10,808	5,468	4,806	4,449

族は昔アポ・タウ（またはアポ・ダタ、あるいはラレン・バウエイ）と呼ばれる高原地域に住んでいた。アポ・タウ地域というのはインドネシア領東カリマンタン州側のイワン川、ブジュガン川からマレーシア領サラワク州にかけての国境地域一帯のことである。そして18～19世紀頃、二派に分かれて大移住が行われた。つまりサラワク側への移住と東カリマンタン側への移住である。東カリマンタン側に向かったクニャー族は、カヤン河最上流域に広がる高原地域におちついた。この地域の名前がアポ・カヤン (Apo Kayan) である。当初アポ・カヤン地域にはカヤン族が先住していたが、クニャー族の侵入と同時に下流部へ移住して行ったという。それ以来アポ・カヤン地域は、東カリマンタン側に広がるクニャー族の中心地でありかつ故郷として今日に至っている。現在の行政区分に当てはめるとアポ・カヤン地域はカヤン・ウルー郡とカヤン・イリル郡にまたがる高原地域ということになる。調査対象村のうち2つは、このカヤン・ウルー郡に属する。

インドネシア独立前13,000人と言われたカヤン・ウルー (Kayan Hulu) 郡の人口は、独立後急激に減少し始めた（表1）。1966年から1975年の間の減少はすさまじい。9年間に人口が半減してしまったのである。流行病や戦争による人口減少ではない。移住による人口流出である。では何故彼らはアポ・カヤン地域から出て行ったのであろうか。すぐに思いつくのは、土地人口比率の高まりによる移住というテーゼである。つまり焼畑地域においては、土地に対する人口圧が高まると休閑期が短縮されその結果土地が劣化する。そし

てその土地により扶養され得なくなった人々が移住を余儀なくされるというのである。ところが既にマハカム河の中・下流域に移住しているクニャー族の人々に対する調査の結果、彼らが自覚している移住の理由は、もっと他のところにあることがわかった。かつてアポ・カヤン地域は今以上に周囲から孤立した地域であり、塩その他の生活必需品を得るのが非常に困難であった。彼らは生活必需品を得るために、数カ月かかって下流の村やサラワク方面へ旅をしては戻るといった生活を繰り返していた。旅から帰った男たちが持ち帰った商品や下流地域の情報は、徐々にではあるが彼らの考え方や生活様式を変えていったに違いない。また1930年代半ばに、初めてプロテスタントのミッションがアポ・カヤン地域に入った。それまでの民族宗教は鳥占い、豊じょう儀礼、治療儀礼を中心とするもので、多くの禁忌が存在したため、簡潔で分かりやすいキリスト教に改宗する者も出てきた。これに対抗する形で旧来の儀礼的煩雑さを簡素化したブンガン教という改革宗教が1940年代にクニャー族自身によって創始されたものの、結局キリスト教の普及力にはかなわなかった。これはクニャー族固有の文化変化において決定的な役割を果たした。こういった背景のもと、1950年代はじめから、彼らは生活必需品入手の便利さ、および子供の教育機会の獲得を求めてマハカム河中・下流域に向かって移住し始めたのである。焼畑までの距離が遠いこと、及び陸稲の生産量が減少したことは共に彼らの移住理由を形成していなかった。

しからば、人口密度は彼らの移住とは関係ないのであろうか。確かに、現時点で調査対象村の人口密度は、ロング・ベタオ (Long Betaoh) 村が 1.4人/km²、ロング・アンブン (Long Ampung) 村が 4.6人/km² と低い。しかし、ロング・アンブン村の場合、依然とし

て人口流出が続いている。統計上の人口密度ではなくて、彼らの最も重要な経済活動である焼畑との関連で人口密度をとらえ直してみよう。村の人口を彼らが必要とする焼畑用地の面積で割った値を、「潜在的人口密度」とする。彼らが必要とする焼畑用地は、2つに分けることができる。まずは、既にローテーションが確立して、一定の休閑期を経て数年毎に利用されている土地。そしてもう1つは、原生林あるいは商業伐採後の既伐採林から作られる焼畑である。つまり「潜在的人口密度＝人口／（二次林からつくられる焼畑用地面積＋原生林からつくられる焼畑用地面積）」となる。ただし、原生林（または既伐採林）からつくられる焼畑用地面積の場合、厳密には休閑期を無限大として計算すべきであるが、ここでは便宜上休閑期を99年として計算する。結果は、ロング・ベタオ村が 22.5人/km²、ロング・アンブン村が 41.4人/km²であった。これに対して、下流域の原生林（あるいは既伐採林）地帯に移住することによって形成された村の場合は、ダタ・ビラン・イリル (Datah Bilang Ilir) 村が 13.6人/km²、グマール・バルー (Gemar Baru) 集落が 5.8人/km²、カラン・ムムス・ダラム (Karang Mumus Dalam) 集落が 3.5人/km²であった。原生林および既伐採林を利用する割合の高い下流域の村の場合、住民の利用可能な森林はまだ外に向かって広がっており、潜在的人口密度はむしろ低くなるのである。逆に奥地（アボ・カヤン地域）の場合、人々は一定の焼畑跡地の二次林の中に住民が押し込められている状態であると言える。東南アジアの焼畑の人口支持力は 25～30人/km² [佐々木 1970] というから、特にロング・アンブン村の潜在的人口密度は現在でもなお高いといえる。クニャー族の人々は経済的利便性を求めてアボ・カヤン地域から流出したのであるが、その背景には「潜在的人口密度」の高まりという

現実も存在していたと推察できる。

2. 調査対象集落

次に調査対象集落の概況を一括して述べておく。

1) ロング・ベタオ (Long Betaoh) 村

カヤン・ウルー郡の14村のうち、滑走路を持つのは5村である。このうち、ムルパティ (Merpati) 航空の定期便が週2回行き来しているのはロング・アンブン村の飛行場だけである。他の4村の滑走路は MAF (Mission Aviation Fellowship) のセスナ機が不定期に利用しているにすぎない。しかし、いずれにせよ飛行場のある村は開発の拠点となっており、郡都であるロング・ナワン (Long Nawang) 村から離れていても、飛行場のある村から近ければ日常必需品入手において恩恵を受けることができる。この意味で、現存する村の中で最も地理的に不便⁴⁾なのが、ロング・ベタオ村である。

1974年に郡都であるロング・ナワン村に小飛行場が開設され、現在不定期ではあるが前述の MAF のセスナ機が就航している。またロング・アンブン村には1984年からムルパティ航空の小型機が週1回、1987年からは週2回の定期就航を実施している。したがって、州都サマリンダ市からロング・ベタオ村へは、ムルパティ航空の定期便を利用してロング・アンブン村経由をとるのが通常である。サマリンダ～ロング・アンブン間の飛行時間は1.5時間。ロング・アンブン村で1泊した後、徒歩7時間でロング・ナワン村に到着。

4) 地理的な不便さ：筆者が調査にはいる直前までは、最も地理的に不便なのはマトゥロン (Matulong) 村であった。最寄りの村であるロング・アンブンまで徒歩3日を要す場所に存在していた。しかし、1988年9月、最後まで留まっていた6家族もついに村を捨て、無人化したのである。

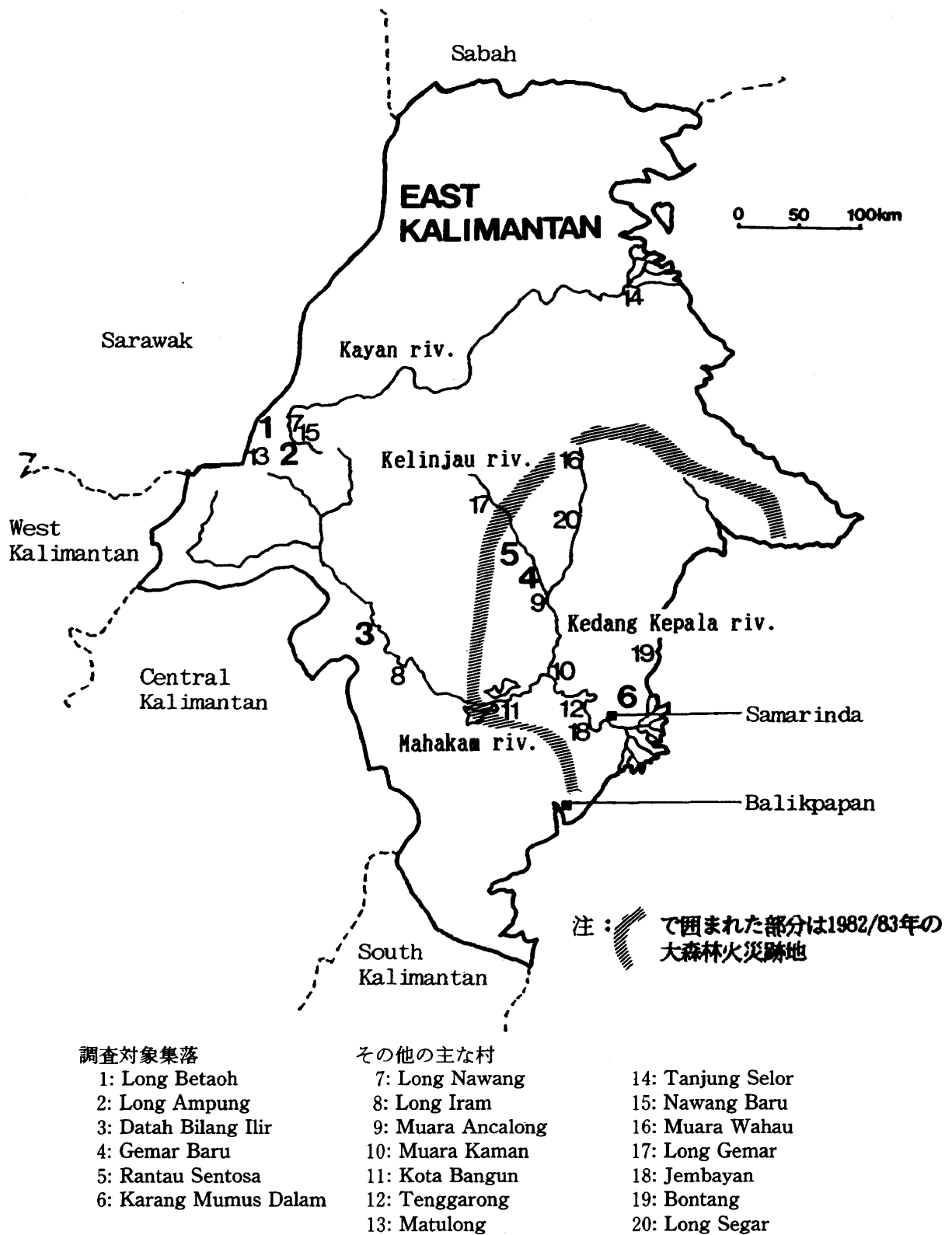


図1 調査対象集落他の位置

さらに1泊して翌日ロング・ベタオ村に向かう。水流の状態がよければ、5馬力の船外機をつけた丸木舟で2.5時間で到着する。しかし水量が増した場合は、危険回避のためロング・ナワン村で足止めをくうことになる。また水量が少ない場合は、船の利用が困難なので徒歩5時間を余儀なくされる。

この村には気象観測所がないので正確な気象データは入手できない。しかし年間雨量4,000 mm以上の地帯に含まれている。ちなみにロング・ナワン村の年間降雨量は4,159 mmであり、ロング・ベタオ村はそれよりも多いことは確かである。標高は500–1,000 mにわたり、集落は谷間の川沿いに位置し、およそ標高650 mである。USDA⁵⁾による土壌分類によるとDystropeptsとTropudultsに覆われている。⁶⁾ 森林は国境近くが保安林、それ以外が制限生産林と指定されているが、未だかつて商業伐採が入ったことはない。したがって原生林と焼畑跡地の老齢二次林のな

かに叢林と焼畑が点在しているのが現状である。

本村はレボ・バコン族の村で、以前は長大家屋が14棟存在した。人口もおおよそ1,800はあったという。彼らの多くは、しばしばサラワクの商業伐採現場などへ出稼ぎに行っては戻るといふ生活を繰り返していた。中にはカヤン河をくだってタンジュン・セロール町(Tanjung Selor)へ、あるいはマハカム河中・下流域へと旅をした人もいた。これらは既に述べたように、みな生活必需品入手のためである。結局は便利さを求めて村から出て行く人が続出したのである。多くの人はサラワクへ移住したが、東カリマンタン州内の下流地域へ移住した人もいる。その結果、1969年には既に長大家屋2棟のみの村となってしまった。そして1970年には1つの長大家屋のうち数戸が移住したので、残る長大家屋は1棟となり現在に至っている。その後は飛行場開設のおかげで生活必需品をロング・ナワン村で商人から入手することが出来るようになったので、長旅に出る必要性が減ったこと、および残りの住民全員が近い親戚であることから家族ごと移住して行く者はなくなった。いきおい人口も横ばい状態で、1988年10月現在の総人口は90人、総戸数は12戸、うち6戸は1棟の長大家屋を形成し、残りの6戸は昔の長大家屋あとの一軒屋として残っているものである。村の面積が65 km²であるから人口密度は1.4人/km²となる。

上述のように東カリマンタン州の下流域へ長旅に出る人はいなくなったが、比較的高収入の期待できる商業伐採現場での仕事を求めてサラワク側へ出稼ぎに行く人はあとを断たない。サラワク州へ行った人の収入のうち、20%は交通費と食事、もう20%は煙草代に消え、残りの60%で生活必需品を買って村へ戻るといふ。現在は船外機を使うので朝村を発つと夕方には村を流れるプギアン(Pengian)

- 5) USDA: アメリカ農務省(USDA)は、1950年代から新しい土壌分類体系の検討を始め、その結果をSoil Taxonomyとしてまとめた。このUSDAによる土壌分類体系は、現在世界的に用いられるようになっている。参考までに、本稿に出てくる土壌の大まかな特徴を以下に記す[Buol, Hole, and McCracken 1973]。
- ・Tropudults はアルティソル(Ultisol)に属し、肥沃度が低く塩基状態が悪く、これが農業利用の制限因子となっている。
 - ・Tropofluvents および Fluvaquents は、発達が微弱な若い土壌であるエンティソル(Entisol)に属し、両者とも肥沃である。
 - ・Dystropepts および Tropaquepts は、エンティソルよりは発達しているとはいえずやはり未発達な土壌であるインセプティソル(Inceptisol)に属す。前者は火山性土壌で、後者は年間のある時期水で飽和されることが特徴である。
- 6) 各村(集落)の項で言及する土壌分布については、Land Resources Development Center of England and Department of Transmigration of Indonesia [1987]を基にしている。

川の源流部にたどり着く。それから仮眠をはさみ舟を引っ張って分水嶺を越え、翌朝サラワク側に流れるバリウ (Bariu) 川を下り始めると、夕方にはロング・ブサン (Long Busang) 村に到着する。この村で1泊してさらに下流へ下って仕事を探すのである。彼らにとってみれば不便なロング・ベタオ村に留まるよりも、便利なサラワクへ移住する方が良さそうなものである。しかし全家族が血縁関係で結ばれているので、全員が合意しなければ移住しないという。またロング・ナワン村に血縁者をもつ家があることも村に留まる要因となっている。

2組の老夫婦はまだ精霊信仰であるが、他の全員はプロテスタント系の教会である GPIB (Gereja Protestan di Indonesia Bagian Barat) に属している。ロング・ベタオ村には学校がなく、1983年に初めてロング・ナワン村の小学校に通う生徒がでた。現在はロング・ナワン村に5人、ナワン・バルー村に3人が通学しているが、例外なく親戚の家に寄宿している。診療所 (Puskesmas Pembantu)、小売店共に存在しないので、彼らは必要に応じて郡都であるロング・ナワン村へ出て行くのである。

12世帯全てを調査対象とした。核家族が5戸、親と子供あるいは兄弟などが一緒に住む拡大家族が7戸で、一戸当たり平均人数は7.5人であった。

2) ロング・アンプン (Long Ampung) 村

本村へのアプローチは、ロング・ベタオ村のところで述べたとおりである。採算の合いそうにない路線にもかかわらず、定期就航が続いているのは、政府がムルパティ航空に対して片道7人分相当の援助を行なっているからである。

この村もロング・ベタオ村と同じく年間雨量 4,000 mm 以上の地帯に含まれている。標高は 500-1,000 m で、村はなだらかな起伏

をもつ丘陵地帯に位置する。USDA の土壌分類によると主に Tropudults が分布している。周囲の森林は転換林か制限生産林に指定されているがまだ商業伐採は入っていない。したがって、焼畑跡地の老齢二次林の中に焼畑と叢林が混じる形となっている。

本村はレボ・ジャラン族の村で、やはり以前は長大家屋が14棟あったという。ロング・ベタオ村の人々と同様に、サラワク州やマハカムおよびカヤン河の下流方面へ生活必需品入手のための旅を繰り返していた。そして1950年代初めから主にマハカム河流域へ移住していくグループが出始めた。つい最近村を出た人もいる。1981年の人口が490人、1988年現在の人口は451人である。うち2棟残った長大家屋に住んでいるのが25家族で他は長大家屋跡地の一軒屋に居住する。ところが調査終了直後の1989年2月、長大家屋1棟(名前は Umaq Mpau)が火災で全焼したので、残る長大家屋は Umaq Ampung 1棟となってしまった。村の面積が 97 Km² であるから人口密度は 4.6人/Km² となる。

約40%がカトリック教会に、60%がプロテスタント系教会に属す。後者のうち多数は KINGMI (Kema Injil Gereja Masehi Indonesia) 教会であるが、GPIB (Gereja Protestan di Indonesia Bagian Barat) 教会のメンバーもいる。小学校では4人の教師が93人の生徒を教えている。診療所、小売店共に1軒存在する。

長大家屋2棟の全戸(25戸)を調査対象としたが、11戸が核家族、14戸が拡大家族であった。一戸当たり平均人数は8.5人であった。

3) ダタ・ビラン・イリル (Datah Bilang Ilir) 村

クタイ県 (Kabupaten Kutai) ロング・イラム郡 (Kecamatan Long Iram) ダタ・ビラン・イリル村はマハカム河上流部に位置する。サマリンダからこの村へは、週2便ある定期

客船を使うと2.5日で到着する。客船は朝9時にサマリダ市を発ち、テンガロン (Tenggarong) 町、コタ・バグン (Kota Bangun) 村、ロング・イラム (Long Iram) 村を経由し、3日目の夕方5時頃ダタ・ビラン・イリル村に着く。しかし、もしもロング・イラム村で船外機付きの丸木舟をチャーターして朝7時頃出発すると、正午には到着する。初めて客船が入ったのは1976年である。また1978年からこの村の人も船外機を導入するようになった。したがって、本村からの帰りはロング・イラム村まで船外機付き小舟をチャーターすることも出来る。

Datah は平らの意味で、Bilang は緑あるいは肥沃の意味である。したがってダタ・ビランは肥沃な平地という意味になる。実際、本村は川沿いの平地に位置している。年間雨量は約 4,000 mm、標高は50-150 m である。また USDA 分類による土壌分類でいう Tropudults, Dystropepts, Tropaquepts が分布している。地域一帯は、川沿いが転換林、川から離れると生産林に指定されていて、既に商業伐採が入った場所もある。しかし川から離れると、まだ場所によりかなりの面積の原生林が残っている。

かつてこの地にはバハウ・ダヤク (Bahau Dayak) 族が居住していた。その後当地はコンセッション⁷⁾地域に含有された。しかしすぐに政府が人口再定着事業 (Population Resettlement Project) 用地として確保したので、コンセッション地域からは除外されたのである。1974年に人口再定着事業が始まったとき、170家族のレボ・ジャラン・クニャー族が入植した。彼らは元々ロング・アンブン村に住んでいたのだが、ダタ・ビラン・イリ

ル村の現村長を含めた多数の人が1963年にロング・アンブン村を離れ、2カ所の経由地(一時的定着地)を経て、1974年にダタ・ビラン・イリル村を形成したのである。しかし、中には別のコースを辿って来たり、つい最近になって直接ロング・アンブン村から引っ越してきた人もいる。

人口再定着事業を通して政府は屋根用のトタン、釘、鋏、鋸、なた、籾、野菜の種、牛、ニワトリ、豚、山羊等を実償で供与した。また農業技術指導を行ったり、診療所、教会、教員住宅、学校などの建設も行なった。これらの援助は隣のダタ・ビラン・ウルー村と併せて実施された。したがって小学校は各村に1校ずつであるが、診療所と中学校は2村の共同である。ダタ・ビラン・イリル村は現在204戸、1,264人の人口を有する村となっている。面積が 40 km² であるので人口密度は31人/km² である。

85%の家庭がレボ・ジャラン・クニャー・ダヤク族、その他はバクンパイ・ダヤク族、バハウ・ダヤク族、バンジャル族、ブギス族、ジャワ族である。65%の家庭がプロテスタントで、23%がカトリック。この両者共にダヤク族である。また残りの12%がイスラム教で、バンジャル、ブギス、ジャワの各族で占められている。プロテスタントの場合、全てがKINGMI教会に属している。

第3隣組 (RT3; Rukun Tetangga 3) の26戸全部を調査対象とした。そのうち半数が核家族で後の半数が拡大家族であった。一戸当たり平均人数は6.9人であった。

4) グマール・バルー (Gemar Baru) 集落

本集落はクタイ県ムアラ・アンチャロン郡 (Kecamatan Muara Ancalong) ロング・ナ村 (Desa Long Nah) に属する1つの集落 (Dusun) であるが、近い将来村に格上げされる可能性が強い。マハカム河中流に北から注ぐクダン・クバラ (Kedang Kepala) 川の支流

7) コンセッション (concession): インドネシアでは、政府が国営林産公社や民間企業に一定期間の森林伐採権 (コンセッション) を与えて森林開発を行なっている。

であるクリンジャウ (Kelinjau) 川右岸の平地に位置する。郡都であるムアラ・アンチャロン村まではサマリンドからはほぼ毎日出ている客船を利用することが出来る。サマリンドを朝9時に出発した後テンガロン町、ムアラ・カマン (Muara Kaman) 村を経由し翌日午前10時頃ムアラ・アンチャロン村に到着する。そこで7馬力エンジン付きの小型客船に乗り換え、ゆっくりとクリンジャウ川を遡ると午後3時にはグマール・バルー集落に着くことが出来る。

年間雨量は 2,500-3,000 mm の範囲。ちなみに1987年のムアラ・アンチャロン村での年間雨量は 2,052 mm, 北方に位置するムアラ・ワハウ (Muara Wahau) の年間雨量は 2,572 mm である。また、標高は約 50 m である。USDA 分類による土壌は、川の近くが Tropaquepts, Tropofluvents, Fluvaquents で、川から離れると Tropudults, Tropaquepts となる。周囲の森林は転換林に指定され、また1982/83年の大森林火災 (図1参照) の跡地でもある。一帯がコンセッション地域で既にかんりの伐採が行われていること、及びかなり昔から焼畑がされていたことから周囲に原生林は乏しい。

本集落はレボ・ジャラン・クニャー族が大多数を占める集落である。彼らは元々ロング・アンブン村に住んでいたが1953年に第一次大移住が行われた。この一団は途中3カ所を経て1969年には一部の人々がロング・グマール集落に居を構えた。一方で1963年、1968年にも第二次、三次の大移住がみられ、なかには途中で第一次大移住のグループに合流してロング・グマールに来た一団もあった。そして既に人口約1,000人を擁すロング・グマールの住民全員が、1977年にグマール・バルーへ移住し始めたのである。しかし、この地域にはかつてモダン・ダヤク族が住んでいた。したがって周囲にはモダン族の焼畑跡地が多

く、いきおいクニャー族とモダン族の間で土地利用に関する調整がなされるに至った。もしも前者が後者により植えられた籐、果樹、コーヒーの存在する焼畑跡地を焼畑として利用する場合、前者は収穫後、15缶 (約 165 kg) の籐を後者に支払う。それ以外の焼畑跡地の場合、バナナの有無に係わらず前者は、後者の許可を得た上で無償利用することが出来る。そして、数年後再び当該地を利用する場合でも許可が必要である。つまり焼畑跡地の場合クニャー族はあくまでもモダン族から土地を借りるに留まるのである。

レボ・ジャラン・クニャー族がグマール・バルーに入植した直後の1980年から1986年まで、人口再定着事業が実施され、様々な面にわたって政府の援助を受けた (ダタ・ビラン・イリル村と同様)。そして人口も増え続け、1988年現在総人口1,675、家族数430の集落となり、ロング・ナ村全体の約65%を占めている。種族構成は401家族 (約93%) がレボ・ジャラン・クニャー族で他はクタイ族 (15家族)、モダン族 (8家族)、ジャワ族 (6家族) である。尚、ロング・ナ村全体の人口密度は 7.5人/km² である。

宗教構成を見てみると、1988年12月現在、住民の95% (クニャー族とモダン族) がプロテスタント、残り (クタイ族とジャワ族) がイスラム教徒である。プロテスタントのうち99%は GKII (Gereja Kemah Injil Indonesia) 教会のメンバーで、GPIS (Gereja Pantekosta Indonesia Selikat) 教会メンバーは6家族のみである。GKII は KINGMI の新しい呼び名である。グマール・バルーには小学校が2校、中学校が1校あり周辺の集落からの通学者も多い。診療所も設けられている。協同組合の店の他にクニャー族の小売店が9軒、クタイ族の小売店が3軒あり、人々の生活必需品を提供している。大多数が焼畑により生計を維持しているが、近くの商業伐

採現場で5人、国营林産公社である INHUTANI で20人が働いている。村所有の発電機は集会場と教会のために使われている。精米所もあり、精米後の米1缶 (Kaleng) につき1kg 支払うことになっている。

家族形態は、調査家族18戸のうち10戸が核家族で8戸が拡大家族である。また、一戸当たり平均人数は6.8人であった。

5) ラントー・セントサ (Rantau Sentosa) 集落

本集落はクタイ県ムアラ・アンチャロン郡 ロング・ブントック村 (Desa Long Bentuk) に属する1つの集落 (Dusun) である。前述のグマール・バルー集落から船外機付き丸木舟で約3時間上流、つまりサマリンドを出発して2日目の夕方6時頃に、ラントー・セントサ集落に到着する。

年間雨量はグマール・バルー集落と同じく 2,500-3,000 mm で、標高約 50 m, 川沿いの平地に位置する。USDA の土壌分類による Tropaquepts, Tropofluvents, Fluvaquents が広く分布している。周囲の森林は転換林に指定されている。1982/83年の大森林火災跡地でもある。一帯はコンセッション地域であるが、村の近隣は未伐採であること及び先住のモダン族の焼畑が川沿いに限られていたことから徒歩1時間で火災跡地の原生林が広がる。

この集落も、レボ・ジャラン・クニャー族が大多数を占める集落である。彼らは元々ロング・アンブン村に住んでいたが1953年に第一次大移住が行われた。この一団は途中3カ所を経て、1969年にはその一部が前述のロング・グマールに、約600人がラントー・セントサに居を構えた。その後1968年にロング・アンブン村を出た一団は、途中2カ所を経て、一部はダタ・ビラン・イリル村へ、他の約300人が1970年にラントー・セントサ集落に合流した。しかし、この地にはかつてモダン

・ダヤク族が住んでいた。したがって居住地と焼畑用地両者について話し合いをして土地の区分けを行なった。ただし、クニャー族に割り当てられた地域の中で、モダン族が植えた籐がある場所の場合は収穫後10缶の籐をクニャー族からモダン族に支払うことにした。

さてラントー・セントサ集落の人口は1986年には約1,200人であったが、村の中でいざこざがあって多くの人が村から出て行ってしまった。大部分はムアラ・ワハウ村へ移住していったが、中にはサマリンド近くのカラン・ムムス・ダラム集落やジュンバヤン (Jembayan) 集落に行った者もある。1988年現在は130戸、650人でロング・ブントック村の総人口の47%を占める。130戸の内訳は、クニャー族が90戸、クタイ族が30戸、ブギス族が8戸、ブトン (Buton) 族が2戸である。尚、ロング・ブントック村全体の人口密度は2.8人/km² である。

宗教構成を家族数で計算すると、プロテスタント (クニャー族) が68%, カトリック (クニャー族) が1%, イスラム (クタイ族, ブギス族, ブトン族) が31%となる。プロテスタントは、全員が GKII (Gereja Kemah Injil Indonesia, 昔の KINGMI) 教会に属している。小学校、中学校共に1校ずつある。診療所も設けられている。協同組合の店の他に小売店は2戸ある。以前はINHUTANIの造林労働の参加する女が多かったが、現在は大豆の生産に手が離せなくなりあまり参加していない。

都合上、調査対象戸数が11戸と少ないのだが、うち4戸が核家族、7戸が拡大家族であった。一戸当たり平均人数は7.6人であった。

6) カラン・ムムス・ダラム (Karang Mumus Dalam) 集落

本集落はサマリンド市サマリンド・イリル郡 (Kecamatan Samarinda Iril) スンガイ・ピナン・ダラム村 (Kelurahan Sungai Pinan

Dalam) の第46隣組 (RT46) に属する1つの集落である。サマリンドからボンタン (Bontang) へ通ずる道路を車で1時間ほど行くと、道路沿いにある第46隣組 (カラン・ムムス・ルアールと呼ばれている) に着く。そこから西へ向かって徒歩約1時間でカラン・ムムス・ダラムに到着する。

年間雨量は2,000-2,500 mm, 標高は約50 m, 村の周囲一帯は起伏に富む。USDA 分類による土壌は Tropudults, Dystropepts である。周囲の森林は転換林に指定されている。1982/83年の大森林火災跡地であり、さらに商業伐採の行われた跡地でもある。したがって、既伐採林の中に焼畑跡地の二次植生と小規模なアランアラン草原が点在しているのが現況である。

かつてダタ・ビラン・イリル村に住んでいたある1人の男が、1982年の大森林火災の直前に家族と共にこの場所に入植した。これが、この集落の始まりである。子供の教育のこと、および教育費の捻出方法を考えた上での移住であった。つまり初めからコショウ生産によって現金収入を得る予定だったのである。その後、この男に合流する者が続き、彼は現在首長 (Kepala Adat) としてこの集落をまとめている。現在でもまだ人口流入は続いているが、1988年末現在人口428、戸数84の集落となっている。84世帯のうちティモール (Timor) 族が2世帯、ブギス族が2世帯、クタイ族が1世帯で、あとはすべてクニャー族しかも大部分はレボ・ジャラン族である。またクニャー族79戸のうちダタ・ビラン・イリル村から移住してきたのが9戸、ラントー・セントサ集落からが57戸、ロング・セガル (Long Segar) 村からが12戸、グマール・バルー集落からが1戸である。

人口増加傾向は、サマリンド市全体に見られる現象である。1971年に137,918であった人口が1980年には264,012、そして1988年に

は349,301と増加し続けている。サマリンド・イリル郡だけでみても同様に、1971年の人口が64,030、1980年が113,581、1988年が137,284と増加の一途をたどっている。ちなみにサマリンド・イリル郡の人口密度は1,990人/Km² であるが、これは市街部も含まれるのでカラン・ムムス・ダラム集落周辺の人口密度とは大きな隔たりがある。

宗教構成を家族数で計算すると、プロテスタントが87%、カトリックが10%、イスラムが3%である。学校の校舎はないが、教会を使って小学校5年生までの教育を受けることができる。また11人の中学生 (女子のみ) はカラン・ムムス・ルアール (サマリンド〜ボンタンを結ぶ道路沿いの集落) まで徒歩通学している。診療所はない。小売店は3件存在するが彼らも焼畑をやっている。1986年に精米所を始めた人がいて、料金は白米1缶につき1 Kg である。

調査対象25戸のうち10戸が核家族で15戸が拡大家族である。また、1戸当たり平均人数は、6.1人であった。

III クニャー族の経済・社会とその変容

1. 政治組織

もともとアボ・カヤン地域に住んでいたクニャー族全体の大首長は Tu'a Adet Biuq と呼ばれる。この大首長は全ての村 (Lepoq) の首長 (Tu'a Lepoq) による話合いで決められる。各々の村は、いくつかの長大家屋 (Umaq Daduq) によって形成され、その長のことを Tu'a Umaq という。長大家屋長は Penggawaq と呼ばれる長老会議のメンバー (だいたい50歳以上の全員) によって補佐される。村によっては長老会議より下位に、比較的若い人による数人の代表 (Penggawaq Lawa) を設置している。それ以外の一般住民を "Kelunan Kadoq," 長大家屋を形成する

1つ1つの家を“Amin (または Lamin)”という。

アポ・カヤン地域は現在、行政的に2つの郡に分けられ、それぞれ郡長 (Camat) が政府から派遣されている。しかし、各々の郡では、村長の話し合いを通して1人ずつ大首長を選んでいる。焼畑用地をめぐる紛争、異性問題、長大家屋間の争い、慣習的保安林 (Tanaq Mulen) の中の木の所有に関する紛争 (既にある人が目印をつけたにもかかわらず、他の人が伐ってしまう場合等) のうち、村レベルで解決できない場合は大首長が調停にはいるのである。

クニャー族の伝統的統治システムを支えていたのは身分制度⁸⁾で、首長と長大家屋長は必ず上位身分の者から選ばれた。この慣例は

- 8) 身分制度：クニャー族には首長、貴族層を頂点として5つの世襲身分が存在した。インドネシア独立後次第に首長、貴族層の権力は弱まり、1970年代には身分制度 (社会階層) は表面的にはほぼ解消したと言われている。しかし、今だに村長は上層身分から選ばれ、住民全体で首長のための焼畑を作る制度も存在している。また精神的にもまだ身分制度から自由になり得ていない面もある。同じクニャー族でも種族により、各階層の呼び方が異なる。さらに、同じ種族 (例えばレボ・ジャラン・クニャー族) でも、アポカヤン地域に居住していた時代の長大家屋ごとに若干の用語の差異がみられる。しかし、内実は同一である。第1階層は首長層であり純血を保っている。貴族層すなわち第2、第3階層は階層間の婚姻を数多く経験している。レボ・タウ・クニャー族の場合は、親も子供と同じ階層に所属する。つまり階層間婚姻により、本人自身も階層が上下するのである。これに対して、レボ・ジャラン・クニャー族は階層間結婚しても本人自身の階層は不変である。第4階層は、住民の大多数を占める平民層である。そして、第5階層は奴隷層である。戦争で勝った村の首長層が捕虜として預かっている負けた村の首長層の子供たちが、奴隷層を形成する。奴隷は首長層の家に住み込み彼らに奉仕する。したがって結果的に平民層よりも有

現在でも依然として守られている。

現在における村の政治組織内部へ目を転じてみよう。現在では、アポ・カヤン地域の村にも政府の指示により村長 (Kepala Desa)―書記 (Sekretaris)―数人の部長 (KAUR: Kepala Urusan), というラインが既に導入され、村議会 (LMD: Lembaga Musyawarah Desa) も名目上設置されている。しかし、村長にはかつての首長が、書記や部長 (一般業務担当部長、行政担当部長、村落開発担当部長など) には、長大家屋長および長老会議のメンバーが選ばれている。またアポ・カヤン地域外に移住したクニャー族の村のうち、ダタ・ビラン・イリル村では、政府指示によるラインとは別に慣習法を司る役割を持つ慣習法長 (Tu'a Adet) を村長の下位におき、書記や部長は長老会議メンバーから選ばれている。長大家屋はなく、人々は独立家屋に住んでいるので、当然ながら長大家屋長は存在しないが、その代わりとなるのが政府の指導で設置した隣組長 (Kepala Rukun Tetangga: Kepala RT) である。このようにして、慣習的政治組織と、現行法上の政治組織が融合しているのである。

しかし、もっとサマリンダに近いグマール・バルー集落、ラントー・セントサ集落、カラン・ムムス・ダラム集落においては、現行法上の行政ラインとは別に、慣習的政治組織 (慣習法長―長老会議) を設置し、そのメンバーも別々である。慣習的政治組織と現行法的政治組織が次第にかい離しているのである。慣習的政治組織の存在意義が薄れていく過程であるといえる。

2. 所得源

まずは、各集落における森林産物の採取活

利な政治的、経済的保護を受けることもあった。もしも優秀ならば、第2階層の女性と結婚して第3階層に入ることもできたのである。

動について述べる。ロング・ベタオ村の場合、12戸中11戸の男達が農閑期に籐の採取を行なった。多くの人は年間で1週間以内であるが、中には暇があれば籐の採取のため森林に入る人もいる。ロング・アンブン村の場合は、25戸中6戸がこの1年間のうち約2週間（1戸は2カ月間）かけて砂金を採集している。砂金採集はダタ・ビラン・イリル村の人々にとっても重要である。26戸中16戸（約60%）が、実に合計で1週間から5カ月間、ある特定の場所に仮小屋を作って砂金を採集した。グマール・バルー集落では、砂金および沈香を採取したのは、ともに18戸中3戸のみである。約3カ月もかけて砂金採集を実施した1戸以外は、2～4週間で沈香および砂金採集にあてている。ラントー・セントサ集落の場合、ほぼ全戸が年間4～18日の間で砂金採集を行っている。砂金や沈香は通常全てが販売されるので現金所得に結び付くが、籐の場合は自家消費分も含み、また籠を作ってから販売

する場合も多くみられる。したがって、籐の生産量を把握するのは容易ではない。

次に、一戸当たり年間平均収入に米の自家消費分をも含めた所得内訳をみしてみる（表2）。森林関連所得については販売分しか把握していない。つまり頻繁にイノシシ、シカ狩りをして、自家消費分は表の数字から除外されているのである。既に述べたが、籐にしても同様である。したがって現実には、森林関連所得の割合はかなり高くなると見込まれる。それでもやはり、サマリンダ近郊のカラン・ムムス・ダラム集落では森林関連所得の重要性は低くなっている。その分コショウからの所得が多いので、農業所得全体の重要性が高くなっている。賃労働に関しては、奥地（アボ・カヤン地域）の村（ロング・ベタオ、ロング・アンブン）では当然少ない。しかしマハカム河流域の村のうち商品作物を導入していない村（ダタ・ビラン・イリル、グマール・バルー）ではかなりの割合を占めて

表2 所得内訳 (%)

村 の 名	農 業 所 得				森 林 関 連 所 得					他			実数所得 (Rp.)
	米	家畜	他	計	狩り	籐	沈香	手工 芸	計	金	賃 労働	計	
ロング・ベタオ村	28	1	0	29	17	0	5	37	59	0	12	12	730,000
ロング・アンブン村	79	5	3	87	0	0	0	6	6	6	1	7	466,000
ダタ・ビラン・イリル村	35	0.6	0	35.6	0	4	8	2	14	11	39.4	50.4	1,730,000
グマール・バルー集落	39	1	1	41	0.1	0	18	0.1	18.2	25	15.8	40.8	1,937,000
ラントー・セントサ集落	58	0	7	65	0.5	0	26	0.5	27	4	4	8	5,906,000
カラン・ムムス・ダラム集落	36	1	40	77	1	0	0	4	5	1	17	18	1,338,000

注）・農業所得（家畜）：おもにニワトリ。

・農業所得（他）： コショウ（カラン・ムムス・ダラム集落）、大豆・バナナ（ラントー・セントサ集落）、パイナップル（ロング・アンブン村）など。

・森林関連所得（手工芸）： 籐の籠、農作業用の笠、木彫り人形など。

・他（賃労働）： ロング・ベタオ村の場合は、村長他としての政府からの手当ておよび、丸木舟の製作・販売。ロング・アンブン村の場合、滑走路の草刈り。ダタ・ビラン・イリル村、ラントー・セントサ集落の場合は、商業伐採現場での労働。グマール・バルー集落の場合は、国营林産公社、商業伐採現場での労働、および公務員。カラン・ムムス・ダラム集落の場合は、製材や公務員。

・尚、実数所得の欄は、当該村（集落）での価格を基にした数値である（サマリンダ市の価格にデフレートしてない）。

いることがわかる。ラントー・セントサ集落の場合、たとえ商品作物（大豆）の所得割合が低くても、農作業の手間との関係で賃労働は少ないのである。

米は全ての村（集落）において完全自給されている。米の生産量を年間米消費量で割った値はロング・ベタオ村が 1.13, ロング・アンブン村が 3.17, ダタ・ビラン・イリル村が 1.14, グマール・バルー集落が 2.13, ラントー・セントサ集落が 9.09, カラン・ムムス・ダラム集落が 1.93 である。ラントー・セントサ集落の場合、極端に高い値となっているのは、人々が販売を意識して陸稲を生産しているからである。実に、1 戸当たり平均年間現金収入の 40.9% が米の販売により得られているのである。

住民の間に所得格差を生む原因は村によって様々である。ロング・ベタオ村の場合は籐の籠、ロング・アンブン村の場合は籐の籠、農作業用笠 (Selaun), バイナップル, 金, ダタ・ビラン・イリル村の場合は賃労働, 籐, 沈香, グマール・バルー集落の場合は沈香および金, ラントー・セントサ集落の場合は沈香および賃労働, カラン・ムムス・ダラム集落の場合はコショウからの現金所得の多寡によって、住民間の所得格差が生ずる。

3. 外部との経済的紐帯

ロング・ベタオ村の人々は、天然の籐 (Wei) で編んだ籠 (Anjat), 狩りで捕ったイノシシやシカの肉, ニワトリなどを、郡都ロング・ナワン村へ運びそこで物々交換をするか、あるいは貨幣に替えて必需品を購入して村に戻る。村の中では貨幣は殆ど使われていない。ロング・ナワン村には協同組合所有の店を含めて小売店が 4 戸存在する。多くの商品は、サマリンダ市からムルパティ航空機を使ってロング・アンブン村に、そしてさらに船外機をつけた丸木舟でロング・ナワン村ま

で運ばれる。運賃は、ムルパティ機が超過料金の場合 Rp. 500/kg, 貨物扱いの場合 Rp. 260/kg, 丸木舟が Rp. 150/kg である。時には MAF のセスナ機で、サマリンダ市やタンジュン・セロール町から直接ロング・ナワン村に運び込まれることもある。その場合の運賃は Rp. 1,650/kg である。サマリンダ市より遥かに物価が高いのもうなづける。例えば、サマリンダで 1 リットル当たり Rp. 200 である灯油がロング・ナワン村では Rp. 1,500 である。4 戸の小売店のうち 1 店は中国系商人の経営で、広くアポ・カヤン地域から籐の籠, 沈香, 砂金を集めてサマリンダ市へ、また籐をタンジュン・セロール町へ売っている。ロング・ベタオ村の人々は、籐の籠や沈香を彼に売るのである。

ロング・アンブン村の人々は、ニワトリとパイナップルをムルパティ機の乗務員と物々交換することにより必需品の一部を得ている。また金探しや籐の籠及び農作業用の笠 (Selaun) の販売により現金収入を得て、村に一軒ある小売店で必需品を購入する。

ダタ・ビラン・イリル村の人々は商業伐採現場他での賃労働, 及び砂金, 沈香, 籐の採取・販売によって現金収入を得ている。砂金は採取場所に来ている仲買人に、沈香は採取場所から村へ帰る途中の村にいる仲買人に、籐はダタ・ビラン・イリル村にある店へ売る。ダタ・ビラン・イリル村には 6 戸の小売店と 3 戸の水上小売店がある。うち 2 戸は自分で貨物船を所有しているが、他はサマリンダから来る客船の乗務員から荷を仕入れ、あるいは米を販売している。水上小売店のうち 2 戸は、籐を住民から買い取り、それを客船の乗務員に売っている。

グマール・バルー集落の人々の主な現金収入源は砂金, 沈香の採取・販売, 及び商業伐採現場や国营林産公社での日雇い労働である。砂金と沈香は、自らサマリンダへ持参し

て店に売るのが通常である。小売店は集落内に12戸もあるので、住民は必需品を購入する他に米を売ることもしる。

ラントー・セントサ集落のごく少数の人が沈香および賃労働によって多大の現金所得を得ているが、大多数の人は余剰米の販売、大豆、バナナ等の生産・販売、砂金の採取・販売によって現金収入を得ている。この集落では、1984年に活動を開始した協同組合が非常に重要な役割を果たしている。住民から砂金、大豆、米を買い取って、自前の船で月の2回サマリンドまで売りにゆく。そして必需品を入手してラントー・セントサに戻るのである。バナナ、コーヒーは住民が直接、小型客船の乗務員（仲買人）に売ることが多い。

カラン・ムムス・ダラム集落の場合、現金収入の62%がコショウの生産・販売によるものである。人々は、自分でコショウをサマリンドの市場へ運んでブローカーへ売る。そして、必需品を購入して集落へ帰るのである。とはいえ、集落内にある小売店もしばしば利用される。

サマリンドに集まった森林産物などのうち、籐の籠、砂金、果物類、米等は主にサマリンド市で消費され、沈香や籐は最終的には国外へ輸出される。ただし、籐はジャワ島のスラバヤなどで製品加工されてから輸出されるのである。

4. 貨幣経済の浸透

調査対象全集落において商品経済はかなり

浸透していた。ここでいう商品経済とは、既に述べたように物々交換経済と貨幣経済を合わせた概念である。ロング・ベタオ村の人々の生活は、ほぼ物々交換によって成り立っている。またロング・アンブン村の人々は、生活必需品の一部を物々交換で入手する。これに対して他の集落においては、人々の生活は貨幣経済によって媒介されていることがわかった。

貨幣経済の浸透度合を表したのが表3である。基本的には下流に移住するにつれて、貨幣経済がより浸透している状況が表れている。ただしラントー・セントサ集落の場合、大豆という商品作物を生産しているので、地理的にはグマール・バルー集落とほぼ同位置であるにもかかわらず、かなり貨幣経済が入っている。しかしサマリンド市街地近郊の、しかも収益性の高いコショウ栽培を導入したカラン・ムムス・ダラム集落よりもラントー・セントサ集落の方が現金支出が多いのは意外である。支出内訳を調べると、この現象の説明がつく。第1はカラン・ムムス・ダラムは非常に新しい集落であり、生産の始まったコショウ畑を有する世帯は僅か40%にすぎない。所得の低さが制限要因となり、支出が抑えられているのである。第2はラントー・セントサの場合、集落が比較的古くて社会資本も整い落ち着いているのを反映してか、教育費がカラン・ムムス・ダラム集落の2倍ときわめて多い。第3は川のないカラン・ムムス・ダラム集落では不要な船外機用の燃料費が

表3 1戸当たり平均年間現金支出（単位：ルピア）

少ないく			>多い		
ロング・ベタ オ村	ロング・アン ブン村	ダタ・ビラン・ イリル村	グマール・バ ルー集落	カラン・ムムス・ ダラム集落*	ラントー・セ ントサ集落*
4,200	9,600	307,800	375,100	437,300	492,000

注）全ての数字は1988年12月時点の Samarinda での物価水準に換算してある。またラントー・セントサ集落とカラン・ムムス・ダラム集落（*印）は位置が入れ替わる。

ラントー・セントサ集落では現金支出のかなりの割合を占めている。特に第1及び第2の状況は、一旦コショウの生産が始まれば変化する可能性がきわめて高い。調査時点において、44%の世帯が多大の現金収入を得うるコショウ生産の開始直前であった。すなわち、まもなく84%の世帯がコショウの販売で収入を得るようになる。カラン・ムムス・ダラム集落の現金支出が、ラントー・セントサ集落を追い越すのは時間の問題である。したがって、貨幣経済の浸透はラントー・セントサ集落よりもカラン・ムムス・ダラム集落の方が高いとするほうが妥当であろう。

5. 日常生活における相互扶助制度

クニャー族の社会では以下に示す相互扶助システムが、人々の日常生活において重要な働きをしてきた。

- a) 「緊急時の協力 (Bikaq)」: 火災時、人が川で溺れかけている時、山や焼畑でけが人が出た時等の緊急時に際して、村人全員が力を合わせて対処すること。
- b) 「土産 (Nyelampaq)」: 村人が旅から帰ってきた時、或いは旅人が村に立ち寄った時に塩や服などを分けてもらうこと。
- c) 「持寄り (Papit)」: 米など欠乏している人がいる場合、多くの村人がその人に少しずつ贈与すること。および共同作業に際して食べ物を皆で持ち寄ること。
- d) 「要請による贈与 (Naq Tengan)」: 必需品の欠乏している人が何人かの村人たちに物を乞い、うち1人がその物を贈与すること。
- e) 「自発的贈与 (Naq Tuaq)」: 必需品の欠乏している人に対して自発的に物を贈与すること。

- f) 「相対要請による贈与 (Ny'at Tuaq)」: 必需品の欠乏している人が他の1人に物を乞い、後者が前者にその物を贈与すること。
- g) 「不等価物々交換 (Ukan Menyat)」: ある物を必要とする人が、その所有者と物々交換を行うこと。但し前者、つまりその物を必要とする人に有利な不等価交換である。
- h) 「前借り (Ngengut Ubut)」: 米など欠乏している人が他人から借りて、収穫後に等量を返済すること。
- i) 「教会への米の寄進 (Baa Sidang)」: これはキリスト教の布教後にできた新しい習慣である。教会運営のために村人たちが米を寄付すること。日曜日の礼拝時に集める場合と、収穫高の10%を集める場合とがある。

表4を見ていただきたい。アポ・カヤン地域の村（ロング・ベタオ村、ロング・アンブン村）では頻繁に行われている相互扶助が、マハカム河流域へ移住することによって消滅しているのがよくわかる。特にロング・ベタオ村では、「相対要請による贈与」および「自発的贈与」により、必需品等の相互贈与がほぼ毎日行われている。各世帯間に家計の壁がなく、村全体で1つの家計を形成しているのである。その対極に大豆を商品作物として栽培しているラントー・セントサ集落がある。ほとんどの伝統的な相互扶助がすたれてしまっているのだ。ところがカラン・ムムス・ダラム集落では、再び相互扶助が復活している。集落がきわめて新しく、相互扶助が必要であるからこそ、復活であると考えられる。しかし、もしそうならば、近い将来は再び消滅するであろう。以上から、下流域にゆき、貨幣経済の浸透が高まると相互扶助制度が崩れてゆくことがわかる。

表4 相互扶助の頻度

村 の 名	持寄り	不等価物 々交換	土 産	相対要請 による贈 与	要請によ る贈与	自発的贈 与	前借り
ロング・ベタオ村	○	○	○	◎	○	◎	○
ロング・アンブン村	×	○	○	○	○	○	△
ダタ・ピラン・イリル村	△	×	×	△	×	△	×
グマール・バルー集落	○	△	×	△	△	△	△
ラントー・セントサ集落	△	×	×	×	○	×	×
カラシ・ムムス・ダラム集落	○	○	×	○	○	○	○

注) ◎：ほぼ毎日 ○：しばしば △：まれ ×：なし

6. 土地保有制度

クニャー族の伝統的土地保有制度についてまず説明する。一番最初に原生林を伐開して焼畑をつくった人が、その土地の保有権を持つ。つまり先占取得が基本原則である。但し、他の人も保有者の許可を得れば、対価無しにその土地を利用することが出来る。尚、用材木の伐採、あるいは燃材の摂取に関しては、他人の焼畑跡地であっても他人が付けた山刀による目印がない限り、保有者の許可無しで利用できる。

相続の基本原則は簡単である。親が原生林を最初に使った時に同居していた子供全員に、同等の相続権が与えられるのである。したがって、結婚して既に家を出た子供は親と同居中に開いた土地に対してのみ相続権を持ち、それ以後開かれた土地の相続人とはならない。但し、相続人から許可を得れば対価無しで利用できる。さらに相続人（単数でも複数でも同じ）の子供は全員が同等の権利を持つ。しかし、相続権に関して劣位にある他の孫たちも、許可を得ればこれまた対価無しで利用できる。これら相続の原則は、本人及び周囲の者が正確に認識している土地に限られる。誰の所有か忘れられた焼畑跡地は、村の保有地となるのである。自分が若い頃使った土地を忘れる人も結構多いこと、および3代目になると1つの土地に対する保有権者が多

数にのぼること、を考えると相続はもともと非常に曖昧なものであると言える。

村からどこかへ移住して出て行った人の焼畑跡地は村の保有地となり、出て行った人の保有権は失われる。村に残っている人が使いたい場合、首長に報告するだけでよい。たとえ移住した人が戻ってきても、村に残って当該地を使っている人の方が優位な権利を持つが、通常両者の話合いで調整される。但し、果樹は残っている家族の所有となる。

総合してみるとクニャー族の土地保有制度は、名目上の占有権よりも利用権の方が優越していることがわかる。

この他、伝統的にクニャー族の村では、一種の保安林を設定している。長大家屋や丸木舟用の板、屋根のこけら板、棺桶用の木などを残しておくため、焼畑利用が禁じられている森林である。狩猟は自由にできる。この森林（土地）はクニャー語で“Tanaq Mulen”といわれ、距離も村からせいぜい徒歩1～2時間のところにある。この保安林の中に上記目的のため利用したい樹木がある場合、もしもその樹木に他人が山刀でつけた目印がなければ、自由に伐採できる。

長大家屋の庭は“Lasan Umaq”と呼ばれ、1つ1つの家(Amin)を区切る壁の延長線上を境界としている。しかし各家の表と裏ともに、せいぜい8cmぐらいまでが庭として認

識されるのみである。この庭は、各戸の責任のもとで清掃をする。但し、果樹やパイナップルなどの多年生作物は、場所にかかわらず植えた人の所有物である。

さて、アポ・カヤン地域の村のうちロング・アンブン村では、現在でもクニャー族の伝統的土地保有制度がそのまま生きている。ロング・ベタオ村では、あまりにも急激な人口流出のため、基本的変化はないものの、土地保有制度の後退が見受けられる。この村の人々は、毎年全員が同じ地域にまとまって焼畑をつくるので、各人の焼畑跡地は全員によって正確に認識されている。しかし、かなりの人口流出の結果多くの焼畑跡地の二次林が村の保有となっていること、及び現在の12家族全部が血縁関係にあって共通の相続地が多いことから、本人の焼畑跡地以外の二次林はほぼすべて全員の共有地的な認識となっている。また、ほとんどの世帯主がまだ若い世代に属するので、自分の焼畑跡地を再度焼畑として利用したことがない。つまり、毎年12家族が一緒に、先祖か移住者の焼畑跡地の二次林の中から適地を選び、12に区画して焼畑を作るのである。したがって原則的には個人保有の概念はあるものの、焼畑跡地の個人保有は意味をなしていないのが現状である。また、保安林は村から歩いて30分のところに設置されていた。しかし、今はもう人口が少なく、もっと近い所にいい林（老齢二次林）がたくさんあるので、もはや保安林の必要性がなく、全く使われていない。

これに対して、マハカム河流域の村々では以下に示すように明らかな土地保有制度の変容が見受けられる。

- a) 全ての村において、もはや保安林は存在しない。
- b) 原生林を伐開して焼畑耕作を行うだけでは、保有権は認められにくい。果樹などを植えて、初めて保有権が社会的

に認められる。これは、グマール・バルー集落、カラン・ムムス・ダラム集落で見られる変容である。

- c) 一度村から出て行った人が再び村に戻ってきた場合は、たとえ別の人が現に土地を利用していたとしても、前者がもともと保有していた焼畑跡地に対して有利な権利を持つ。これは、ダタ・ビラン・イリル村、ラントー・セントサ集落で確認される。実際には、本人同志の話合いで調整されるが、ラントー・セントサ集落において、最近話合いがこじれ、長老会議の判断に委ねられた例が1件あった。結果は、出戻りした人により多くの土地保有が認められたのである。
- d) 親の死亡時に同居している子供が、第1位の相続権を持つ。カラン・ムムス・ダラム集落でこの変容がみられ、法的な所有権を獲得する可能性のあるコジョウ畑に関しても相続に関しては同様に考えられている。

マハカム河下流域の村（集落）で見られる上のような変容は、貨幣経済の浸透に伴う土地保有制度の近代化の過程とみることができる。

7. 土地保有構造

奥地（アポ・カヤン地域）のロング・ベタオ村では、焼畑用地の個人保有が現実的には無意味であった。ロング・アンブン村では平均1戸当たり17.5個の焼畑用地を保有し、うち37%が相続地で、54%が村を出て行った人がかつて保有していた土地、自分で原生林を伐採して獲得した土地は僅か9%である。また、焼畑用地保有規模のばらつきはあるものの、所有する焼畑用地数は集落の経済構造になんの影響も与えない。

マハカム河流域に形成された村のうちダ

表5 土地保有構造 (ダタ・ビラン・イリル村)

面積規模 (ha)	戸 数 (戸)	平均保有焼 畑用地数 (カ所)	平均土地面積 (ha)					平均居住年数 (年)
			焼 畑	水 田	宅 地*	借 地	合 計	
A. 0	4	0	0	0.5	0.040	0.93	1.47	2.5
B. 0-5	10	2.8	2.4	0.45	0.042	0.43	3.32	9.5
C. 5-10	10	6.0	7.2	0.55	0.047	0.30	8.10	12.4
D. 10-	1	10.0	11.0	0.5	0.041	0	11.54	13.5
全 体	25	3.9	4.3	0.5	0.042	0.44	5.28	9.7

* ここでいう宅地とは、住居とそれを囲む家庭菜園を含んだものである。

ダ・ビラン・イリル村では、入植時期により焼畑用地保有規模が規定される(表5)。つまり早く入植した人ほど多くの焼畑用地を保有しているのである。グマール・バルー集落では、多くの人が同時に入植したので、焼畑用地保有数はほぼ一定である。ラントー・セントサ集落の場合も、商品作物の大豆を生産しているにもかかわらずグマール・バルーと同様な状態である。商品作物生産の成否が土地の集積をもたらすには至っていないのである。したがって、土地保有構造が人々の生活を規定することはないといえる。森林産物や砂金の採取により必要な現金収入を得ているのである。ところが、サマリダ近郊で収益の高いコショウ栽培を行うカラシ・ムムス・ダラム集落では、コショウ畑保有面積により所得が強く規定されるようになる(表6)。今の所、自家労働で管理できる以上にはコショウ畑面積を広げていない。1989年1月現在、

1戸当たり平均1カ所、0.5 ha のコショウ畑を所有しているに過ぎないのである。しかし、コショウ畑所有規模は現金収入において決定的な役割を果たすので、近い将来には住民の間で階層分化が起こる可能性もないとはいえない。

IV クニャー族の焼畑耕作とその変容

1. 循環システム

非常に興味深いことに、クニャー族の人々は焼畑跡地の二次植生を、その遷移ステージによっていくつかに分類していることがわかった。あくまでも植生の回復状態が重要であるので、年数は土壌条件等によりおのずと異なってくる。用語は各村によって若干の違いはあるが基本概念は同じである。

ロング・ベタオ村の場合、放棄直後を“Bekan”(以下、「放棄直後の植生」という)、

表6 土地保有構造 (カラシ・ムムス・ダラム集落)

コショウ畑面 積規模階層 (ha)	戸 数 (戸)	平均コショウ 畑面積 (ha)	平均焼畑用地 数 (枚)	平均居住年数 (年)	1戸当たり平均年間現金	
					収 入 (Rp.)	支 出 (Rp.)
A -0.25	9	0.22	2.3	2.7	343,833	367,699
B 0.25-0.5	11	0.41	3.3	3.8	497,250	391,229
C 0.5 -	5	1.06	2.8	4.4	2,643,100	663,960
全 体	25	0.5	2.8	3.5	871,190	437,305

表7 土壌種類別植生回復速度（ロング・ベタオ村）

二次植生区分	黒い土の場合	肥沃な赤い土の場合	乾性の黄色い土の場合
放棄直後の植生	—	—	—
叢 林	2年目から	3年目から	4年目から
二次林	4年目から	6年目から	12年目から
大きな二次林	8年目から	18年目から	30年目から
疑似原生林	18年目から	33年目から	50年目から

注) 黒い土はほんの僅かであるという。

まだ林内に多くの草本類が存在する叢林を“Jue Dumit”（以下、「叢林」という）、草本類は既に少なくなり木の太さも人間の腿ぐらいまでに回復した状態を“Jekau”（以下、「二次林」という）、さらに木が大きくなり放棄直後に生えた陽樹で枯死するのもでてくるのが“Jekau Lataq”（以下、「大きな二次林」という）、そして最後は見かけ上原生林と変わらない状態になったのを“Empaq cen Jekau”（以下、「疑似原生林」という）とそれぞれ区分している。但し、本物の原生林（Empaq）では大木として存在するが、疑似原生林ではまだ大木になりきれない樹木がいくつかあるので、前者と後者の区別が出来るという。さて以上の4区分の他もう1つ“Tanaq Metan”と呼ばれる焼畑跡地がある。かつて人口が多かった時代に乾性黄色土の原生林を伐採して2年続けて焼畑をやった人もいた。ところが、その跡地の植生は極端に回復速度が遅い。このような土地が“Tanaq Metan”と呼ばれているのだ。キャッサバを植えた土地も Tanaq Metan になりやすいという。

表7は聞き取り調査を元にした土の種類別植生回復速度である。彼らは土壌を黒い土、肥沃な赤い土、乾性の黄色い土の3種類に分けている。長年の経験から、それぞれの土での植生回復速度をおおよそ把握している。もちろん、黒い土の場合で示されるように、幼樹から陰樹への交代が10年弱で始まるとは思えない。彼らにとって重要な識別要素は、上

層木の大きさと、草本性植生の多寡であると言することができる。また、年数はあくまでも結果であり、分類上重要なのは各々の土地における植生の回復度である。7年で「二次林」にまで植生が回復する場所があれば、10年たっても「二次林」にならない場所もある。

上述のように、二次植生の区分において最も重要なのは植生回復度、特に樹木の大きさであるので実際に測定を行なった。各類型の最小林分を調査した結果が表8及び図2である。基本的には彼らは二次植生が「二次林」になるまで待てば、再度その土地を伐採してよいとされている。ところが人口密度が低下した現在、彼らは「大きな二次林」か「疑似原生林」を伐採して焼畑を行なっている。最近5年間の焼畑における伐採時の植生類型について全家族に対して聞き取り調査を行なった結果、原生林が10%、「疑似原生林」が62%、「大きな二次林」が24%、「二次林」が0%、「叢林」が4%であることが判明した。「放棄直後の植生」を利用して焼畑耕作を実施した人、つまり2年続けて同じ場所を耕作した人はいない。原生林以外は焼畑跡地の二次林であるから、休閑期を求めることが出来る。各々のステージにまで回復するのに必要な平均最低年数から計算すると、平均休閑期は最低で29年となる。

ロング・アンプン村における焼畑跡地の二次植生の類型は次の通りである。「放棄直後の植生」が“Bekan,” 2-3年たったまだ「草

表8 ロング・ベタオ村における二次植生の調査結果（プロットの大きさ 20 m×20 m）

	叢 林	二 次 林	大きな二次林	疑似原生林
土 壤	肥沃な赤土	肥沃な赤土	肥沃な赤土	肥沃な赤土
傾 斜 度	25度	25度	15度	35度
林 齢	4 年	7 年	約20年	不明
上層の樹高	7 m	17 m	27 m	測定不可能
胸高直径別本数				
0-5 cm	多い	多い	少し	少し
5-10 cm	45	34	13	7
10-15 cm	7	21	7	16
15-20 cm	0	1	6	14
20-25 cm	0	0	6	5
25-30 cm	0	0	3	4
30-35 cm	0	0	0	1
35-40 cm	0	0	0	2
40-45 cm	0	0	0	1
最大胸高直径	14 cm	19 cm	27 cm	41 cm
優占樹種	Benuaq Bine	Benuaq Bine	Bahatilang	Uba (大木) Noh, Ampang Tukan Tuke(小さい木)

注) Benuaq=*Macaranga triloba*, Bine=*Mallotus sp.*,
 Uba=*Myristica sp.*, Noh=*Shorea sp.*,
 Ampang=*Dipterocarpus sp.*, Tukan Tuke=*Neolitsea sp.*

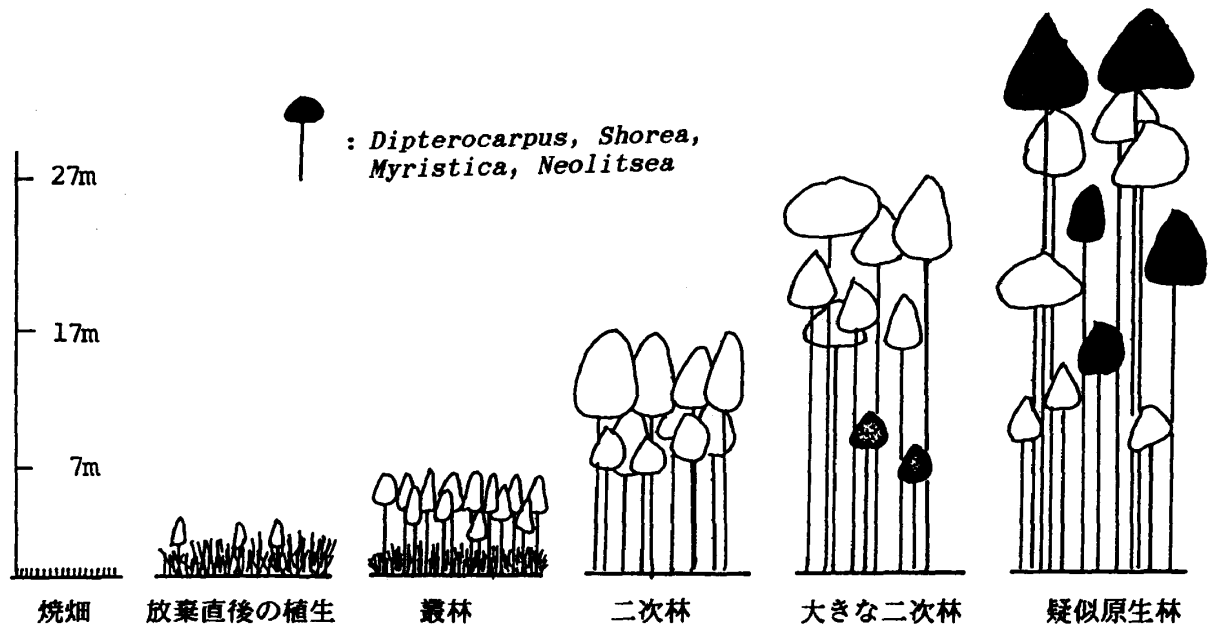


図2 ロング・ベタオ村における森林類型

の多い叢林」を“Jekau Calem (Jekau Metan),” 5-6年経った「草の少ない叢林」を“Jekau Buet (Jekau Jue),” 10-12年経って腿の太さぐらいに木が成長した「立派な二次林」を“Jekau Buteq,” さらに木が大きくなり枯死する陽樹も出て来る「老齢二次林」が“Jekau Buteq Lan,” そして最後は疑似「原生林 (“Empaq”)」に戻るのである。最近3年間の焼畑の伐採時の植生類型について、調査対象25家族に対する聞き取り調査の結果、原生林が0%, 「立派な二次林」が75%, 「草の少ない叢林」が23%, 「草の多い叢林」が2%であることがわかった。やはり、2年間連続耕作はされていなかった。各々のステージにまで回復するのに必要な最低年数から計算すると、平均休閑期は最低でも10年となる。

ダタ・ピラン・イリル村では、現在焼畑跡地は4つに分類されている。第1が「放棄直後の植生 (“Bekan”)」, 但し収穫後1年以内の跡地のみをさす。第2が草の多い「叢林 (“Jekau Metan”)」。第3が草の少ない「若齢二次林 (“Jekau Buet”)」。第4が「立派な二次林 (“Jekau Buteq”)」である。「立派な二次林」は、木の太さが腿ぐらいまで成長した段

階をさし、焼畑跡地がこの状態に回復して初めて再度利用するのである。土壌により開きはあるが、この村の周辺ではほぼ5~6年で「立派な二次林」になるという。しかし、彼らにとって重要な基準は植生の回復状態であり、年数は参考に過ぎない。そこで草の多い「叢林」と「立派な二次林」について、最小林分を選び植生調査を行なった。その結果が表9である。また、入植以来14年間の焼畑における伐採時の植生類型について聞き取り調査を行なった結果、原生林が42%, 「立派な二次林」が46%, 「若齢二次林」および草の多い「叢林」が8%, 「放棄直後の植生」が4%であることがわかった。原生林以外について、各々のステージにまで回復するのに必要な最低年数から計算すると、平均休閑期は最低でも5年となる。

グマール・バルー集落の人々は焼畑跡地の二次林を4つに分類している。放置後2年目までが「放棄直後の植生 (“Bekan”)」, 3年目からが草の多い「叢林 (“Jekau Metan”)」, 4~5年目からが草の少ない「二次林 (“Jekau Kelayan”)」, そして最後が「疑似原生林 (“Jekau Buteq”)」である。「二次林」に

表9 二次植生の調査結果 (ダタ・ピラン・イリル村)

	叢 林	立派な二次林
プロット	10 m × 10 m	20 m × 10 m
林 齢	2 年	5 年
上層の樹高	5.5 m	13 m
胸高直径別本数		
	0- 4 cm 多数	0- 4 cm 左より少ない
	4- 5 cm 14	4- 8 cm 16
	5- 0	8-12 cm 7
		12-16 cm 8
		16-20 cm 5
		20- 1
最大胸高直径		25 cm
優占樹種		Benuaq, Jerak Bun-bun

注) Benuaq = *Macaranga triloba*, Jerak Bun-bun = *Macaranga rhizinoides*

なれば焼畑として再利用されるのである。ところが、この集落でいう「二次林」は草本性植生こそ少ないが、木の太さはまだ腕ぐらいで樹高も 7.8 m にしかなくない。ダタ・ピラン・イリル村では、草の少ない「若齢二次林」に相当し、再利用されるに至らない。グマール・バルーでは、このような林分を早くも再利用するわけである。最近3年間の焼畑における伐採時の植生類型についての聞き取り調査の結果、既伐採林が50%、「二次林」が20%、草の多い「叢林」が11%、「放棄直後の植生」が19%であることがわかった。既伐採林以外の類型について、各々のステージにまで回復するのに必要な最低林齢から計算すると、平均休閑期は最低で3.4年となる。

ラントー・セントサ集落の人々は、焼畑跡地の二次林を4つに分類している。放置後1年間で「放置直後の植生（“Bekan Cengalem”）」、その次が草の多い「叢林（“Jekau Metan/Buet”）」、7-8年経って草が少なくなりさらに腿の太さぐらいにまで木が成長したのが「立派な二次林（“Jekau Buteq”）」、まだ存在しないが木が胴の太さぐらいにまで成長した状態が「疑似原生林（“Jekau Empaq”）」である。これとは別に、植生回復速度が極端に遅い二次林を“Jekau Kelayan”という。これは草の多い叢林より草は少なくなっており、将来は立派な二次林にまで回復するだろうと考えられている。場合によっては原生林の場合3回まで、「立派な二次林」の場合2回まで連続して耕作されることもある。

ラントー・セントサ集落の人々は、焼畑跡地を利用して大豆及びコシウを植えているので、「陸稲—大豆—コシウ」間の土地の回し方も知る必要がある。まず比較的平らな場所は陸稲と大豆の生産に使われる。この地に移住後、モダン・ダヤク族をまねて1975年から大豆を植える人がではじめ、今ではほぼ全員が大豆生産を実施している。陸稲—大豆

の作付順序は以下に示すいくつかのパターンに分けられる。

- 1) 原生林の場合：まずは陸稲を生産する。翌年、「収穫直後の植生」を利用してもう一度陸稲生産を行う。陸稲の収穫後、再び「収穫直後の植生」を整地して3～5月に大豆を植え付け、3カ月で収穫できる。大豆収穫後の跡地（これも「収穫直後の植生」）で再び陸稲を生産する場合もある。
- 2) 近距離の「立派な二次林」の場合：まずは陸稲生産を行う。陸稲の収穫後3～5月に大豆を植え付け、3カ月で収穫。大豆収穫後の跡地で再び陸稲を生産する。地力が衰えてなければ、陸稲の収穫後もう一度大豆を生産できる。
- 3) 遠距離の「立派な二次林」の場合：まずは陸稲を生産する。陸稲の収穫後、3～5月に大豆を植え付け、3カ月で収穫しておしまい。
- 4) 「叢林」の場合：通常は他の場所で陸稲の播種終了後の9～11月の間に、叢林を伐採する。1週間の乾燥後、火入れを経て大豆を植え付ける。翌年は陸稲生産を行う。

次に、傾斜地の場合は陸稲の収穫後コシウが植え付けられる。コシウの植付けは、これ以上の人口流出を食い止めるために皆で話し合った結果、1986年から始まったばかりである。したがって、まだ収穫可能な人はいない。当時はカラン・ムムス・ダラムから苗木を入手した。

さて最近3年間のラントー・セントサ集落での焼畑における伐採時の植生タイプの聞き取り調査の結果、原生林が30%、「立派な二次林」が40%、「叢林」が3%、「放棄直後の植生」が27%であることがわかった。原生林以外の類型について、各々のステージにまで回復するのに必要な最低年数から計算すると、

表10 二次植生の調査結果（カラン・ムムス・ダラム集落）

立派な二次林	
プロットの大きさ	20 m×20 m
傾 斜	平地
林 齢	6 年
上層の樹高	11 m
胸高直径別本数	
0- 5 cm	多い
5-10 cm	45
10-15 cm	18
15-20 cm	2
最大胸高直径	19 cm
優占樹種	Empung, Karun, Iyung

注) Empung=*Blumea Balsamifera*、他の樹種は学名不明

平均休閑期は最低で4.9年となる。また陸稲生産で使われる「放棄直後の植生」のほとんどが、大豆生産跡地であることが特徴的である。

カラン・ムムス・ダラム集落の場合、焼畑跡地の二次林の分類は4区分である。放置後2年間で「放棄直後の植生（“Bekan”）」、次が「草の多い叢林（“Jekau Cengalem” または “Bekan Cengalem,” “Jekau Metan”）」、草が少なくなったのが「二次林（“Jekau”）」、そして6年ぐらいして木が腿の太さぐらいにまで成長したのが「立派な二次林（“Jekau Buteq”）」である。この地域は砂質土が結構見うけられ、またアランアラン草もやすい

と言う。だから、既伐採林を利用して焼畑をやる場合でも、2年続けて畑を作ることは無い。表10は最小の「立派な二次林」を調査した結果である。最近3年間の焼畑における伐採時の植生類型に関する聞き取り調査の結果、既伐採林が98%、「放棄直後の植生」が2%であることがわかった。つまり、まだ焼畑用地の循環利用はなされていないのである。

尚、カラン・ムムス・ダラム集落の人々はコショウを作っているが、植付け時期はいつでもよい。ほぼ全員が、焼畑跡地の「放棄直後の植生」を整地してコショウ畑を作っている。

さて、各村（集落）での平均休閑期における二次植生の回復度合を示したのが、表11である。ロング・ベタオ村の場合、「大きな二次林」の段階になって焼畑跡地は再利用されている。これに対して、ロング・アンプン村、ダタ・ビラン・イリル村、ラントー・セントサ集落ではロング・ベタオ村の類型でいう「二次林」の段階で再利用している。さらに、グマール・バルー集落では、草本性植生こそ少なくなったものの、樹木の大きさではロング・ベタオ村でいうところの「叢林」の段階で、早くも再利用してしまう。

既に述べたように、「休閑期における植生の回復度」は焼畑システムの環境に対する影響を表す1つの基準であると考えられる。表11において上に位置する村の焼畑システムほど安定しており、下の村ほど不安定で環境に

表11 循環システム

村 の 名	平均休閑期 (年)	休閑期における植生の回復度 (H=樹高、DBH=胸高直径)	ロング・ベタオ村での類型
ロング・ベタオ村	29	H>27 m, DBH=36 cm	「大きな二次林」
ロング・アンプン村	10	H=14 m, DBH=24 cm	「二次林」
ダタ・ビラン・イリル村	5	H=11 m, DBH=20 cm	「二次林」
ラントー・セントサ集落	5	H=8 m,	「二次林」
グマール・バルー集落	3	H=5 m,	「叢林」

注) 植生回復度は植生調査の結果と平均休閑期から計算したものである。

悪影響を及ぼしやすい焼畑システムになっている。表には載っていないが、カラン・ムムス・ダラム集落での「焼畑（陸稻）—コショウ栽培」システムは、果樹等が混植されるとはいえ、コショウ畑の表土が比較的むき出しに近い状態で約15年間直射日光及び風雨に曝された後放棄されるであろうことから、調査対象6集落の中では最も略奪的であると言える。参考までに述べておくが、東カリマンタンでは、通常コショウは植栽後3年目から収穫が始まり、それから約12年間生産が続けられる。カラン・ムムス・ダラム集落の場合、ほとんどが農薬・肥料をまだ使用しておらず、また地力の著しい低下のため、植栽後約15年後にコショウの木を植え代えることは出来そうにない。

2. 焼畑用地の由来

各村における焼畑が原生林から作られたのか、焼畑跡地の二次林から作られたのかを「焼畑用地の由来」と呼ぶことにする。これを表したのが表12である。奥地の村（ロング・ベタオ村、ロング・アンブン村）、つまり先祖代々の居住地では、ほとんどの焼畑は以前の焼畑跡地の二次林を伐って作られる。しっかりとした循環システムが確立しているのである。これに対して、奥地からマハカム河流域に移住した人々によって形成されたその他の村では、多くの焼畑が原生林あるいは既伐採

林（商業伐採跡地で未だ焼畑が作られていない森林）から作られている。これは、集落の新しさによる結果であり、将来は二次林由来の焼畑割合が増加し、焼畑用地は一定の休閑期（おそらく短い休閑期であろうが）をもって循環利用されるはずである。ともあれ、移住によって新しい村が形成されるということは、原生林（あるいは既伐採林）が消滅するということである。先祖代々二次林を循環利用している村と較べて、多様な動物および植物種の宝庫である原生林を次々と伐採してゆく焼畑集落は、貴重な種の保存という観点からしても環境破壊的であるといえる。

3. 焼畑耕作の技術

クニャー族は、伝統的に2カ所焼畑を作る人が多かった。村から比較的離れた所に作る「大きな焼畑（“Uma Biuq”）」と村の近くの「小さな焼畑（“Kelimeng”）」である。祭りに必須のモチ米が、この「小さな焼畑」で作られたのである。現在でも多くの人が「小さな焼畑」を作っているのは、ロング・アンブン村とラントー・セントサ集落のみである。その他の村（集落）の場合、「大きな焼畑」の中の一角でモチ米も作られている。

ロング・ベタオ村では、人々が原生林を最初に利用しようとするときは、以下に示す基準で焼畑適地を選ぶ。

a) Kayu Tebalut (*Nauclea orientalis*),

表12 焼畑用地の由来 (%)

村 の 名 前	原生林から	既伐採林から	焼畑跡地の二次林から
ロング・ベタオ	10	0	90
ロング・アンブン	0	0	100
ダタ・ビラン・イリル	42	0	58
グマール・バルー	0	50	50
ラントー・セントサ	30	0	70
カラン・ムムス・ダラム	0	98	2

Kayu Ta'ap (*Artocarpus elasticus*), 等の樹木, 及び Udu Penganen (*Selaginella sp.*) などの草本類が存在すること。つまり, 指標植物の有無によって焼畑適地が決められる。

- b) 山刀を土に挿して, 抜いたとき刃に土がたくさん付着する場所。
- c) 苗木の根がまっすぐなところ。
- d) 樹木の葉が黄色味がかっていずに濃い緑色であること。
- e) できるだけ平坦で小川の近く。

焼畑跡地の二次林を再利用するときも, 基本的には上記の基準を当てはめて適地を選定する。しかし, 二次林の場合はその林がまだ「叢林」や「二次林」であるか, あるいは既に「老齢二次林」か「疑似原生林」になっているかの方がより重要となる。

以上の基準にしたがって毎年焼畑用地を選ぶのであるが, この村(ロング・ベタオ村)の場合は全員で1つの場所にまとまって焼畑をするので, それなりの調整が必要となる。毎年伐採の時期になると, まず全員で集まって焼畑適地に関して情報交換する。そして最終的には村長が焼畑適地を決める。翌日, 全世帯主がその場所へ行き12戸分に区分けする。民主的に各々が申告することによって場所が割り当てられるが, 調整が不可能になった場合は, 村長の指示に従うことになっている。1家族だけ別のところに焼畑を作ることには出来ない。狭い面積が森林に囲まれ, イノシシ, サル, シカ, トリの害を受けやすくなるからである。

小川が各々の焼畑の境界となる場合もあるが, たいていは木の枝で作った十字架状の印(Tip)を, 伐りはじめの場所にたて, 内部は山刀で木に傷をつけて境界の目印としている。

焼畑適地を選ぶに当たっての指標植物は, 植生の違いのため村(集落)によって若干異なる。ダタ・ビラン・イリル村での指標植

物は, Kelapat (*Amomum sp.*), Teppo (*Amomum sp.*), Paku Danum (*Dryopteris cucullata*), Paku Julut (*Nephrolepis bisserata*), Peluan (*Dioscorea sp.*), Kayu Bura (*Piper acluncum*), そして野生のバナナである。グマール・バルー集落では, Kelapat (*Amomum sp.*) などの草本類が主な指標植物となっている。カラン・ムムス・ダラム集落では, Kayu Benuang (*Octomeles sumatrana*), Kayu Abong (*Ficus geocarpha*) といった樹木, および Kelapat (*Amomum sp.*) などの草が指標植物である。

クニャー族の焼畑耕作は, 小径木の伐採(Midik), 大径木の伐採(Nepang), 伐採された木の枝落し・玉伐り(Miting), 天日乾燥(Ngetau), 火入れ(Nutung, あるいはMetoq), 二度焼き(Mekup), 播種(Nugan), 除草(Mabau), 収穫(Majau), 脱穀(Mihik)という一連の作業によって成り立っている。防御柵は作らない。

これらの作業の実際をロング・ベタオ村を例にとって見てみよう。まず初めに, 彼らは伐採の開始日を決めるために集まって話し合いをする。そして, 礼拝堂でお祈りしてから伐採を始めるのである。1987/88年の場合, 6月初めに伐採作業が開始された。小径木の伐採は男女一緒に行く。山刀を使い, だいたい腕の太さぐらいまでの植生を対象とする。これが終了すると, 次は男が斧を使って大径木の伐採, 伐倒木の枝落し・玉伐りを実施する。ここまでは, いわば伐採作業であり, 7月末には終了した。約10日の天日乾燥期間を経て, 8月初めに礼拝堂でお祈りをした後一斉に火入れを実施した。防火帯は作らない。人によって斜面の上から燃やす人もいれば下から燃やす人もいる。しかも, 火入れをしたあとは放置するだけである。しかし, これまで森林火災を起こしたことはない。年間雨量が4,000 mmを越え, しかも十分な休閑期をと

っているので、周囲の森林が健全な二次林であるからだろうか。人により翌日から、あるいは2～3日後から二度焼きを始めた。山刀および斧を使って、火入れ後の燃え残りの樹木を集めて燃やす作業を繰り返すのである。

8月末には二度焼きの作業がほぼ完了した。数日から1週間の後、礼拝をしてから村一斉に播種を実施した。一般に男が堀り棒(Tugan)を使って穴を開け、その穴に女が陸稲の粃を数粒入れるのである。堀り棒は、木製の杖のような形状をしている。播種は8月末に実施されたが、残りを9月初めにもう1日行なった人もいる。彼らが使っている米は3種類ある。粒が小さくて最もおいしいとされる Timai, 土地が悪くてもかなりの収穫が得られ粒の大きい Mempat, そしてモチ米である Pulut の3種類である。たいていの人はこの3種類を区別して植えているが、中には Timai と Pulut のみを使う人もいる。陸稲の播種とはほぼ時を同じくして、様々な作物が植え付けられる。まずは陸稲と同じ畑の中央部に植えられるのが、トウモロコシや、キュウリなどの野菜類。特にキュウリは、陸稲の種と混ぜて播種される。出作小屋の周囲には、キャッサバ、センカと呼ばれる *Zingiberaceae* の食用草、サトウキビ、トウガラシ、カボチャやナスなどの野菜類、パパイヤ、タバコ等が植えられる。そして、小川の周囲には、ナス、カボチャ、キュウリの種を蒔くのである。陸稲の播種後1週間から1カ月すると、除草を開始しなければならない。手鋤の一種 (Beluing) が利用される。この作業期間は、人によりまちまちで9月初旬から1月初旬までにわたるが、ピークは9月下旬から10月下旬であった。通常は、除草作業は女の仕事であるが、この村の場合男女一緒に行なっている。米の種類によっては2月上旬から収穫期が始まり、4月末には全ての稲刈りが終了した。まずはモチ米が最初に収穫されるが、

その時点で礼拝と一種の祭り (Ramei Ubeq) が催される。祭りとはいっても、みんなで集まって一緒にモチ米を食べるだけである。収穫に際しては、ジャワ語でいうアニアニ (Ilang Blek あるいは Ilang Ajau) か、あるいは小型ナイフ (Ingen Ajau) を使って穂先のみ摘み取る。収穫時には全員が焼畑の出作小屋に滞在し、夕方から夜にかけて足踏み脱穀 (Mihik) する。現在では、木の枝を利用して腰の高さ位の台を作り、そこに籐製のふるいを敷き、その上に人が乗って足踏み脱穀する。分離された粃は、ふるいを通して落下するわけである。収穫された陸稲は、粃のまま各々が所有している高床式米倉 (Lepubung) に貯蔵される。米倉の材料は、屋根が Kayu Tat (*Cratoxylon arborensceus*), 壁が Kayu Baoq (学名不明), 床が Kayu Ampang (*Dipterocarp sp.*), 柱が Kayu Pilung (学名不明), ネズミ返し (Lalit) が Kayu Pa (Agathis の一種) である。さて、すべての収穫が終了した時点で、収穫祭 (Ramei Undat) が催され、皆で会食して踊りを踊る。なお、半数以上の人は、収穫時のみならず各々の作業時に焼畑で寝泊まりする。焼畑作業時には、村が無人に近い状態になるのである。

他の村においても同様な手順で焼畑作業が行われている。しかし、村により伐採時にチェーンソーが利用される場合もある。例えば、グマール・バルー集落では56%の人が、ラントー・セントサ集落では64%の人が、カラン・ムムス・ダラム集落では68%の人がチェーンソーを使用した。その結果が、伐採作業への投入労働量の減少として現れている(表13)。ダタ・ビラン・イリル村、カラン・ムムス・ダラム集落では、多くの人が火入れの結果が良好であったため二度焼きはしなかった。火入れに対する労働投下量が極端に少ないのはそのためである。また、毎年そうであるがカラン・ムムス・ダラム集落では陸稲の

表13 投入労働量の内訳 (人・日/ha)

作業\村	ロング・ベタ オ	ロング・アン ブン	ダタ・ピラ ン・イリル	ラントー・セ ントサ	グマール・バ ルー	カラン・ムム ス・ダラム
伐 採	196	110	38	76	51	38
火 入 れ	70	41	3	49	35	1
播 種	24	21	19	21	13	22
除 草	172	116	57	80	74	1
収 穫	269	208	105	91	120	110
計	731	497	222	295	292	172

播種後に生えてくる雑草が少ないので、ほとんどの人が除草を省略している。これらの理由により、カラン・ムムス・ダラム集落では、焼畑に費やす労働量が非常に少なくなっている。あいた時間を、コショウ畑の手入れに回すのである。これに対して、ほとんどチェーンソーを使用していないアボ・カヤン地域の村では、伐採労働量が多い。そればかりでなく、除草、収穫時の労働投下量も多く、焼畑に対する総労働投下量はきわめて高くなっている。特に、ロング・ベタオ村ではヘクタール当たり平均総労働投入量は700人・日を越える。人々の生活において、焼畑がいかに重要な位置を占めているかがわかる。

4. 労働組織

クニャー族の焼畑作業は、以下に記すような様々な労働組織を通して実施されている。

- a) 「自家労働 (Bekerja Sendiri)」: 自分の家族だけによる労働のことである。ただし拡大家族の場合、独自の焼畑を作っている別の核家族メンバーによる労働提供は、後述する無償労働提供に含まれる。
- b) 「協同労働 (Pulun)」⁹⁾: これは村中の労働可能なメンバー全員による共同労働のことである。例えば、この労働組織による陸稲の種蒔きでは、1戸1戸の畑を全員で順々に終わらせて

ゆく。この場合、各々の家族間で交換労働力量の計算は行われない。また、病人、未亡人、作業の遅れた人等のために共同で労働提供を行う場合もこれにあてはまる。この労働組織は、不参加に対する過料を伴わない。

- c) 「等価労働交換 (Sunguyung)」⁹⁾: これは家族間の等価労働交換のことである。ある作業の数日前に数家族が1つのグループを形成して、そのグループのメンバーの畑の作業を順々に終わらせていく。たいていは、1つの畑に対して1日ずつであるが、各々の畑に2日要する場合は全てのメンバーの畑を2巡することになる。作

9) 日本の農山村で一般にみられた労働交換は、ここでいう「協同労働」ではなく「等価労働交換」であった。地域により呼名は違うが、ここでいう「等価労働交換」は「イヒ」、「ユヒ」、「テツダヒ」などといわれ、「共同耕作」は「モヤヒ」などと呼ばれていた〔橋浦 1938〕。また、村仕事（道普請、橋普請、火の番など）、共同施設、民家の建築、農耕、等を含んだ意味で「共同労働」という言葉が使われている〔橋浦 1938: 福武 1964〕。ここでは、内容を限定するために「共同奉仕」という言葉にした。さらに、「首長のための共同労働提供」は、いわゆる「本家末家的ゆい」〔濱島他 1979〕に近い概念であるといえる。

業当日、当該焼畑の所有者は昼食と紅茶等を準備するのが通常である。作業によりメンバーが変わることもありうる。

- d) 「無償労働提供 (Mepo)」: 同居あるいは別居の親子間、及び兄弟間でよく利用される。ただし同居の場合、各々が自分の焼畑を所有していることが前提である。
- e) 「共同耕作 (Pemung)」⁹⁾: この単語自体は「共同の」という意味である。したがって、共同で焼畑を作ることばかりではなく、一緒に食事するのも Pemung である。同居の親子・兄弟間で共同して1つの焼畑を作るのはこれに含まれる。
- f) 「有償労働提供 (Metau)」: 支払いが靫でなされる場合と、貨幣で支払われる場合（賃労働）とがある。アボ・カン地域では1970年代になってから賃労働も少しずつ見受けられるようになった。靫が支払われる有償労働提供は、多くの場合陸稲の収穫時に適用される。いずれの作業の場合も、あらかじめ作業地の保有者の合意を得てから参加するが、報酬は作業により及び村により若干異なる。例えば、ロング・ベタオ村の場合、大径木伐採および収穫時には1人当たり1日1缶（約 11kg）の靫が、小径木伐採および除草時には0.5缶の靫が報酬として与えられる。通常1家族1人の参加であり、参加者には昼飯が準備されている。ただし、焼畑作業以外の賃労働はここでいう有償労働提供には含まれない。
- g) 「首長のための共同労働提供 (Map)」⁹⁾: これは村長、慣習法長等の焼畑を作るために行われる無償の共同

労働である。各家族から最低1人は伐採、播種、草刈り、収穫の各作業に対して1日ずつ労働提供することになっている。労働被提供者は、村により若干の違いがあり、村長の場合、村長と慣習法長の場合、時には牧師や郡長まで含まれる場合がある。

- h) 「共同奉仕 (Pekuaq)」⁹⁾: これは村中の労働可能なメンバーによる強制を伴う共同労働である。家の建設、結婚式の準備等ある個人のために行う場合と、道の清掃草刈り、灌がい施設の建造及び補修、焼畑への道の草刈り、村のための焼畑作りなど村全体のために行う場合、及び教会のための焼畑作りのように教会のために行う場合がある。教会のための焼畑作り以外の作業で、もしも許可無しに欠席した場合は、村毎に異なる一定の過料が科せられる。例えば、ロング・ベタオ村の場合、過料は1人1日当たり玄米 2.5 kg である。

各村（集落）において、それぞれの焼畑作業に投下される1戸当たり平均総労働量に占める労働組織ごとの割合を示したのが表14である。意外にも焼畑作業は主に自家労働によって実施されていることがわかった。ただし、播種時には投入労働量のかなりの割合が伝統的な労働組織で行われている。ロング・ベタオ村とカラン・ムムス・ダラム集落では、参加メンバー相互間の提供労働量を考慮しない「協同労働」によって播種される。一方、ダタ・ビラン・イリル村、グマール・ブルー集落、ラントー・セントサ集落では、お互いに提供した労働量を考慮する「等価労働交換」である。したがって、マハカム河流域に移住することにより形成された集落での労働形態と比べて、奥地での方がより原初的な「ゆい」

表14 労働組織

村の名前 (サンプル数)	作 業	適用される労働組織 (%)							1戸当たり平均 年間労働総投下量 (人・日)
		自家労働	協同労働	等価労働交換	無償労働提供	共同耕作	有償労働提供	合 計	
ロング・ベタオ村 (12)	伐 採	98		2				100	117
	火入れ	100						100	41
	播 種		97	3				100	15
	除 草	98			2			100	119
	収 穫	97			2		1	100	169
ダタ・ピラン・イリル 村 (26)	伐 採	61		38			1	100	35
	火入れ	100						100	2
	播 種	4		93	3			100	18
	除 草	69		18			13	100	46
	収 穫	98		1	0		1	100	93
グマール・バルー集落 (18)	伐 採	91		9				100	44
	火入れ	99			1			100	28
	播 種	16	23	61				100	14
	除 草	98		2				100	69
	収 穫	100						100	124
ラントー・セントサ集 落 (11)	伐 採	86		14				100	80
	火入れ	100						100	53
	播 種	24		76				100	23
	除 草	88		12				100	87
	収 穫	100						100	97
カラン・ムムス・ダラ ム集落 (25)	伐 採	67	3	25	1	4		100	51
	火入れ	99					1	100	2
	播 種	8	91				1	100	30
	除 草	100						100	1
	収 穫	75		2	4	19		100	163

井上：クニャー・ダヤク族による焼畑システムの変容

注) ラントー・セントサ集落の場合は、「小さな焼畑」を作っている人もいるが、ここに示してあるのは「大きな焼畑」のみの値である。

であるといえる。一方で、サマリンダ市近郊の新しい集落において、一度はすたれたより原初的な「ゆい」が復活しているのは興味深い。しかし、もしも集落が新しいが故の必要性からの復活ならば、近い将来は再び消滅するであろう。

播種時の他では、ある程度「等価労働交換」によって伐採および除草作業が実施されている村もあることがわかる。

V 総 括

さきに設定した、焼畑システムの動態を表現するための具体的な基準、つまり「1戸当たり平均年間現金支出」および「休閑期における植生回復度」は、それぞれ表3および表11に示された。これをもとにして、各村（集落）の焼畑システムを位置付けたのが図3である。奥地から下流へ移住するにつれて、貨幣経済の浸透が高まり、労働組織、相互扶助制度、慣習的土地保有制度も変質してゆく。特に、収益性の高いコシヨウを導入した都市近郊の集落（カラン・ムムス・ダラム）では、

土地保有規模が所得を規定する状況が見られ始めている。以上のような経済・社会構造の変化に対応するように、焼畑システムも変貌してゆく。そして、その変貌は明らかに環境への負担を増す方向、つまり不安定な方向へ向かっている。ただし、地力を回復させるのに重要な窒素を土壌中に固定する機能のある大豆を導入したラントー・セントサ集落のように、例外もある。これは、すなわち土地利用方法によっては、住民の所得と森林保全をある程度調和させることが可能であることを示唆している。貨幣経済の浸透は止められない状況である現状からすると、このことの意味は大きい。

おわりに：残された課題

本稿はクニャー族の焼畑システムの変容を、村（集落）の経済・社会構造および環境への影響とのかかわりで捉えたものである。しかしながら、貨幣経済の浸透、社会構造の変質、焼畑システムの変容、環境への影響の変化それぞれの関係を現象論的に把握したに

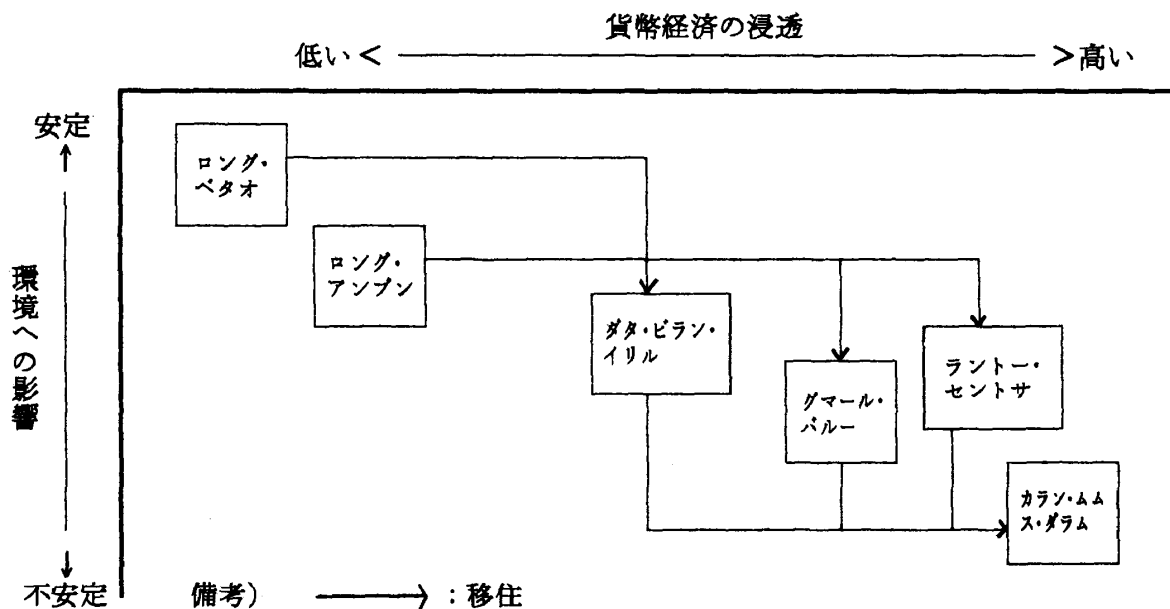


図3 焼畑システムの動態

留まっている。因果関係の考察は、あらためて別稿で行いたい。現象論的な動態把握だけでは、焼畑システムの変容構造を解明したことにはならないからである。また、環境への影響に関しては、さらに自然科学的アプローチによって、しっかりと検証する必要がある。幸い、1990年1月から始まった「熱帯降雨林研究プロジェクト第2フェーズ」において、植生および土壌の研究チームがこれに関連する課題に取り組み始めている。その結果を待って、さらに議論を深めたい。

謝 辞

本稿は、インドネシア共和国東カリマンタン州において実施された「熱帯降雨林研究プロジェクト第1フェーズ」(1985～1989年)の成果のうちの一部である。私自身の派遣期間は、1987年4月から1989年12月末日までであった。インドネシア教育文化省、国際協力事業団の関係者、および現地専門家に感謝の意を表したい。特に、ムラワルマン大学講師の Dr. Abubakar M. L., 調査助手として全ての調査に同行してくれた Mr. Lugan, および Mr. Igin Bilung, そしてプロジェクトの調整員として研究活動を側面から支えてくださった八戸英喜氏、には大変お世話になった。深くお礼申し上げたい。

参 考 文 献

1. 日本語文献
濱島 朗; 竹内郁郎; 石川晃弘. 1979. 『社会学小辞典』有斐閣.
橋浦泰雄代. 1938. 「協同労働と相互扶助」『山村生活の研究』柳田国男(編). 岩波書店.
福武 直. 1964. 『日本の社会』有斐閣.
井上 真. 1988. 「熱帯林減少の背景——社会経済的メカニズム」『林業経済』480.
永田 信. 1990. 「熱帯林減少と木材生産——計量経済学的分析」『第101回日本林学会大会発表論文集』日本林学会.
佐々木高明. 1970. 『熱帯の焼畑——その文化地理学的比較研究』古今書院.
内堀基光. 1987. 「クニャー Kenyah」『ダヤク Dayak』『文化人類学事典』石川栄吉他(編). 弘文堂.
2. 外国語文献
Buol, S. W.; Hole, F. D.; and McCracken, R. J. 1973. *Soil Genesis and Classification*. The Iowa State University Press.
Colfer, C. J. P. 1983. Change and Indigenous Agroforestry in East Kalimantan. *Borneo Research Bulletin* 15 (1) (2).
FAO. 1982. *Tropical Forest Resources*. FAO Forestry Paper No. 30.
Grandstaff, T. B. 1980. Shifting Cultivation in Northern Thailand: Possibilities for Development. In *Resource Systems Theory and Methodology Series* No. 3. United Nations University.
Hadi Soetrisno; Hadi Satyawati; and Hidayat Rachmat. 1985. Swidden Cultivation in East Kalimantan. In *Swidden Cultivation in Asia*. UNESCO Regional Office for Education in Asia and Pacific.
Kartawinata, K.; Soedjito, H.; Jessup, T.; Vayda, A. P.; and Colfer, C. J. P. 1984. The Impact of Development on Interactions between People and Forests in East Kalimantan—A Comparison of Two Areas of Kenyah Dayak Settlement. *The Environmentalist* (4) Supplement No. 7.
Kartawinata, K.; and Vayda, A. P. 1984. Forest Conversion in East Kalimantan, Indonesia—The Activities and Impact of Timber Companies, Shifting Cultivators, Migrant Pepper Farmers, and Others. In *Ecology in Practice—Part I*. UNESCO.
Land Resources Development Center of England; and Department of Transmigration of Indonesia. 1987. *Review of Phase I Results of Regional Physical Planning Programme for Transmigration*.
Spencer, J. E. 1966. *Shifting Cultivation in Southeastern Asia*. University of California Press.
Turner, H. B. L.; and Brush, S. B. ed. 1987. *Comparative Farming Systems*. New York: The Guilford Press.
Vayda, A. P.; Colfer, C. J. P.; and Brotokusumo, M. 1980. Interactions between People and Forests in East Kalimantan. *Impact of Science on Society* 30 (3).